
魔法騎士と精霊魔法師

銀の幻想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法騎士と精霊魔法師

【Nコード】

N6914W

【作者名】

銀の幻想

【あらすじ】

世界の全てを破壊しつくしていた彼は狂っていた。過去に無理矢理行われた人体実験により、最強の体と魔法の力を手に入れさせられたがその代償は精神異常という最悪の結末により世界は滅びかけていた。しかし最後の最後に精霊魔法使いと名乗る女が彼を止めて……。剣と魔法の異世界ファンタジーです。

この小説の更新スピードは結構遅めです。

彼戻ル（前書き）

はじめましての方は初めまして。久しぶりの方はお久しぶりです。
今回はオリジナル小説です。

作者は文章書くのが下手だと思うので、アドバイスなどあったらお願いします。

彼戻ル

ある広い部屋で男と女が戦っていた。

しかし、それは戦いと言つてよいものではなかった。

男は狂った様に戦っているが、女は余裕の表情で椅子に座ったまま男がやることを眺めている。

男の容姿は背中に羽が生えていて、体中汚いものがついていて。逆に女は清楚な身なりをしており、他の人たちから見たら美人と言われそうな身なりだった。

女の前には見えない障壁のようなものがあつて、男の攻撃は全て防がれる。攻撃を放つても女の前の空間をゆがませるだけである。だが女が攻撃した場合は違った。

女が手に持つ扇子をふわりと、軽く煽いただけで男の身体は四方に飛び散る。

でも男は死なない。破損した身体が元の場所に戻り再生するのだ。再生したあと、再び男が攻撃を仕掛け始める。さつきからこれの繰り返しであった。

「あはははは！！ エクストラ 最上級魔法術 ストレート 直線魔法 キサグラム 『六芒星』！」

男は狂ったように笑いながら何かの呪文を唱えた。

男が手を女の方に向けて、自身が持つ最強の1つの魔法を放つ。男の手の前に魔法陣が現れ、さらにそれを囲むように6つの魔法陣が現れる。そしてその魔法陣を結び、星型の紋章が浮き上がる。そこから白い巨大な閃光が女に向かって放たれる。その威力は町を1つ軽く破壊するほどの威力を持つのだが、今回もただ女の目の前にある見えない障壁をゆがめただけであつた。

「ふふ。何度やっても無駄じゃと、さつきから言っておるのじゃが？」

「知らねえな!!」

女が余裕の表情を保ったまま男に話かけるので、男はイラッとしたように乱暴に言葉を返す。

「そんなに慌てなくても、時間はたくさんある。ゆっくりしていけ」
「……ちゃんと殺してやるから安心しろ！」

男が自身の横に提げている剣を抜き女に斬りかかろうとする。女はただその様子を見つめているだけだ。

パン！ というかなりでかい音が部屋に響きわたる。男の剣が女の障壁に弾かれた音だ。

「クソツタレが!!」

「言葉使いが悪いぞ、小僧」

そう言つて女が扇子をまた煽ぐと男はまた粉々になって碎け散つた。勿論剣など見る形もない。
が、やはり再生する。

「……ん？」

今度男が再生した形はさっきまでとは違う形になっていた。右腕がまるで鋭い槍のような形になっていた……。

「あああああああー！」

それを女の障壁に向けてぶつける。ちなみに移動スピードは常人の目では捉えられないような速さだが、女にははつきりと姿が見えていた。

キューン！ という音が部屋中に響く。

今度もまた攻撃が障壁に阻まれて、男の右腕が吹き飛ばされた。が、吹き飛ばされた腕の中からさらに腕があり、もう1度障壁に攻撃を加えると障壁が砕け散った。

「！？」

「終わりだあー！」

そして男が女に向かって殴りかかろうとして………人差し指1本で腕を受け止められていた。

「！？」

今度は男が驚いた。

障壁をぶち破った瞬間にすぐさま対応されるとは思ってもしなかったし、それに自身の攻撃が指先1つで防がれるなんてことは夢にも思っただからである。

「凄いの。私の障壁が破られたのは初めてじゃ」

そう言っ て女は今度は扇子ではなく、自分の手を扇子のようにして煽いだ。

ふわーと風が男の方に少しだけ行っ たかと思うと、その瞬間に男は首1つになっ て体は吹き飛んでいた。今度は体は再生しない。

「あれ……？ 身体が……ない？」

「……そんな姿になっ てもまだ生きているのか」

女は呆れたように男に向かっ て言っ た。

「悪いが精霊魔法を使わさせてもらっ た。お前の身体はもう再生することはない」

「精霊魔法……？」

「知らないのか？ 私は最上位精霊魔法使いじゃ。私の障壁が破られたのは初めてじゃ、誇りに思っ てよいぞ」

「……悪い、狂っ てた時の記憶が曖昧なんだ。お前の言っ てることもあんまり理解できない」

「なんと、それはそれは！」

女はなぜか愉快そうだった。

男は首だけで何も出来ないの で、ただ女の様子を見ていた。

「ふむ。お前がどうしてそうなっ たか、少し気になるのだが見せれもらっ ても構わないか？」

「……好きにすればいい」

「では、失礼する」

そう言っ て女は立ち上がった男の首を持ち上げてから、また元の場所に戻り、自らの頭と男の頭をこつんとぶっ つけた。

「ふむふむ。大体わかってきたぞ」

そう言いながら女は男の首を自分の太ももの上に乗せて言った。

「すげえ居心地悪いんですけど」

「なるほどなるほど。16歳の時にあの奴隷大国に奴隷として連れて行かれ、そこで人体実験を76回されてその身体になったのか。ふむ、お前の身体にも精霊魔法がかかっていたようじゃな」

「そういえば……そんなこともあったけど……？」

「んん？ そういえばお前は狂っていた時の記憶はないんじゃないかな？」

「……少しは、記憶にある」

「そうか、では続きを読み取らせてもらうが、よいな？」

「良いつて言ってるだろ」

「そうじゃったな！」

女は笑いながらまた男の頭を自身の頭にぶつける。

「そこから改造された身体で奴隷大国を潰し、他の国も全て破壊してきたのか……なんと、私が少し目を離しているうちに人間はお前が全員殺してしまったか！ それに、魔物の森もほとんど焼き尽くすとは……なんと面白い！」

「面白い？ どこが面白いってんだ！？ こんな体にされてからどれだけ酷い目に遭ったと思ってんだ！！」

「まあまあ。落ち着くのじゃ。今読み取って差し上げる」

「……ちっ」

しばらく女は目を瞑って何かを思考しているように見えるが、どうやらまた男の過去をよ読み取っているらしい。

「その実験で約5年間使い、そこから魔法の訓練をさせられ、さらに10年。それだけの時間でよくここまでやれるような力が付いたな、まあ最強には程遠いが」

「あの俺の力が最強じゃないと？」

「うむ。力を得ることなら誰にだって出来る。本当に強い者というのは、力ばかりには捕らわれてはいない者のことじゃ。」

「まあどうでもいいことだな。その力で俺をこういう目に合わせた奴らに復讐出来たんだからな」

「なるほどな。それから再生能力と自身の強力な魔法の力で本国を潰し、周りの国を潰して行っただな？ そんなことして悔んだりしておらぬのか？」

「……ああ。俺を売った親も殺してやったよ。親を殺したって、何の後悔もないさ……」

男は諦めたように言った。

「そんな声で言われても後悔があるようにしか見えんのだが……」

女は困ったように言った。

「ただ……」

「ん？」

「1つだけ、あるんだ」

「ほう」

女は黙って男の話を聞く。

「自分の国を潰すときだって、俺はやりたくてやったわけじゃないんだ。体が勝手に動いてくし、口は言いたくもないことばかりしゃべりやがるし……」
「ってもこの状況じゃあ、俺はただの大量殺人者だ」

「それはそうじゃな」

「でも、俺は殺されるたびに言葉だけは少しの間普通に話せるようになったんだ。なぜだかわからないけれど」

「それはお前に掛かっている精霊魔法が身体を再生させるのに必要になったから、ということだろう」

「それで俺は自国を潰した後、次の国に行った時、俺は周りの奴らに取り押さえてもらうことが出来てたんだ」

「ふむふむ、続きを」

「そこで俺は地下牢だったか、どこかは忘れていたけれど、閉じ込められていた。そのまま永遠に縛られていたかった。多分そこにも精霊魔法とかがつてのが掛かってたから俺が力で破ることも出来なかった」

「なぜ脱出できたのじゃ？」

「そこによ……馬鹿な奴が来てさ、そいつの姿はぼんやりとしか覚えてないけれど女性だった。で、今でもはつきりと覚えてることがあるんだけどよ、俺の縄を解いちまったんだ……そいつは、俺に向かってこう言いながら。『貴方の目は狂ってなんかいない。きつと何かの間違いで捕まったんだろうから、逃がしてあげるね。』ってな。俺は初めてそいつを殺したくないって思った。でも俺の身体は言うことを聞かなかった。殺してしまったんだよ！縄を解いてもらった瞬間に！」

「……」

「そこから、俺の記憶は完全にないんだ……気付いたらあんたの前で首1個になってた。他の奴らを殺したことは後悔してるって言うたらしてるかもしれないけど、あんまりしてないんだ」

「なぜじゃ？」

「そいつらは俺のことを最後まで化け物としか呼ばなかった、軽蔑した目でしか見ていなかった。でも、あいつだけは違った。少なくとも俺を軽蔑した目でなんて見ていなかった……あいつを殺してしまったこの身体が1番憎い。っても俺の身体は今あんたに吹き飛

ばされてないけどな」

女は黙っていた。男もただ目を瞑っていた。

「なあ、あんたの力で俺を殺すことって出来るよな？」

「……勿論出来る」

「なら、止め刺してくれないかな？　俺はもう生きたくもないんだ。人を殺してばかりの人生だったしよ……このまま永遠に死ぬことすら出来ないなんて嫌だからさ、どうせこのまま元の身体に戻ったら狂っちまうし」

「……そうじゃな」

「悪いな、あんた1人にさせて、他の奴らは全員俺が殺してしまっただろ？」

「大丈夫じゃ、私は人間ではない」

「なんだよそれ？　おかしな冗談か？」

「ふふ。まあ死に逝くお前には関係ないじゃろ？」

「それもそうだな」

女は男の頭を地面において、手に光を集めていき……そして、光が手から消えた。

「おいおい、失敗か？」

「……お前、過去に戻ってみないか？」

「はあ？」

男は女が言っていることの意味が理解出来なかった。

女は男を無視して男の頭を再び自分の方へ持っていく。

「つまり、お前の身体が改造される前に戻ってみないかと、聞いておるのじゃ」

「戻れるのか……？」

「戻れなかったら最初からこんな提案はせんわ」

「戻ったら、あいつは生きてるのか？」

「勿論じゃとも。誰かに殺されたりしていなかったらな」

「なんでそんな可能性があるんだ？ 過去に戻るってことは今と変わらないんじゃないのか？」

「馬鹿者。お前が今の記憶と力を持ったまま、過去に戻って何も変わらないとも思っとるのか？ 断言しよう。私がお前を過去に戻したら何か絶対歴史が変わる」

「そりゃ……俺が殺した奴らはみんな生きてるだろうけど……」

「まあ何があってもおかしくない世界だと思ってくれていい。自分の記憶はあてにならんぞ？」

「元々俺の記憶なんてほとんど無いんだから役に立たねーよ」

「そうじゃな！」

「だろ？」

「それで、どうする？」

「……」

男は考えた。

過去に戻ったとしてどうする？ この世界で自分が殺したのは変わりないし、戻ったからと言って、何か必ず出来るというわけではない。

このまま死んだとしたら、絶対何も出来ない……。

「戻してくれるか？」

「む、そうするか？」

「ああ、このまま死んだとしても、俺は何も出来ない。もし過去に行った世界で俺が何か出来るものがある可能性があるなら、俺はそっちに行く」

「安心しろ、確実にその世界にはお前にしかできないことがある。」

それに、その世界はこの世界とは確実に何かが違っている。用心するとい

「なんで言い切れるんだよ」

「それは私が——だからさ」

「は？ ちゃんと言えよ」

「ああ、もう過去に戻り始めたか。安心しろなんとかなるお前なら——
だってなんとかなる」

「だから、聞こえないって！」

「ああ、最後にお前の言ってた彼女の名前を、教えてやる。彼女は確か——セシル。————になってるから助けてやれ」

重要な部分があんまり聞き取れなかったな。と思いながら男は意識を失った。

1話

巨大な石垣で周りを固めて、外からは何も見えないようにしている場所があった。

石垣の向こうには灰色の何かとても硬い物で固められた建物が建っていた。勿論その建物の中は何も見えない。窓1つとないのだ。そして建物の中は何者かを出さないためなのか、理由はわからないが中は迷路のような構造になっている。

その迷路のような中の道を進みさらに分散されている道の奥の奥に男……いや、少年はいた。

その実験施設の中で両手を鎖で前に繋がれて拘束されている少年の体の中にドクンという音が鳴り響いた。

その体の中に男の記憶が移ったのである。代わりに今までの少年の記憶、人格も吹き飛んでしまった。

少年身体を乗っ取った……と言ってもいいが、別にこのまま放っておいても大量殺人犯になるだけなので、元男は悪い気はしなかった。

少しの間自分がどういう状況でこうなったかということを思い出

すのにしばらくかかったが、あの女の手の光を見ていたら過去こつに来たということ以外は思い出せなかった。

意識が大分覚めて来た頃に、自分の状態がかなり不思議なことに気が付いた。

止まっているのだ。

多分これはあの女が自分の状況を把握する為に用意してくれたものだろうと予想しておく。

周りも止まっているが、自分も止まっているらしい。身体を動かすことは不可能だった。

周りに自分を囲んでいる者達がいた。周りの風景からここは実験施設だとわかったので、研究者だろうと悟った。ここに来て意識を保っていた時間は魔法と武術を教え込まれた時とかなり長い時間だったので、記憶が焼き付いていたらしい。

ゆっくり周りの状況を確認していくと、今自分が置かれている状況も段々とわかってきた。

まず自分はどれほど過去に戻ったかということだ。

これだけの研究者たちがいるということはもう自分は親に売られて研究施設けんしつに来たということははっきりしているし、まだ実験が開始されていないということから、確か16歳くらだったということもわかった。

しかし……と少年は頭を悩ます。

これだけの人数の人間がいて、しかも自分は手を拘束されている状態でどうやってこの状況から逃げ出そうかと。

そつえば、と自分の魔法の力や身体能力はどうなっているのかと疑問に思った。

だが今はまだ周りが止まった状態なので、どうすることも出来ない。もし能力が16歳このときの身体の状態のままだったらという可能性もあるのだ、他の方法も考えることにした。

が、大体15年も前のことなんてそんなにはっきりと覚えている

わけがない。これだけの周りを見てここまでわかったのが逆に驚きだ。とこの後の展開を思い出すのを放棄した。あとは周りの時間が動き出すのを待つばかりである。

「おいおい、いきなり黙ってどうしたんだ？」

周りの研究員が話しかけて来たので、時間が動き出したのがわかった。

「もしかして、俺達にびびって言葉もでなくなっちまったか？」

うえへへ！ という下品な笑い声があがるが、少年は特に気にした様子もなく黙っていた。

「ちつ。なんだこの餓鬼。さっきまで喚いてたくせによ」
「きつと恐怖で怯えきつちまったんだって！ そっとしておいてやれよ！」

恐怖で怯える……ということとは実験内容を俺に話したところなのだろうか？ と心の中で考察する。これ以外に恐怖というものは思いつかなかったのだ。

自分の首を動かせるようになったので、周りの研究者たちの数をざっと見て確認する。大体6、7人くらいだ。

「それじゃあ悪いが、眠ってもらおうか」

それは少しまずい。と心の中では焦ってはいたが表情にはださなようにしていた。

研究者が何やら注射見たいな物を手に持って、少年に近付いてきた。

ここは一か八か鎖を引きちぎれるかやってみるしかないと考えて力を込めた。

「！？ 研究長！ あの検体が鎖を引きちぎりました！」

「そんなことはわかっている！ さっさと押さえろ！」

「はっ！」

手首をかなり痛めたが少年はなんとか鎖を引きちぎることに成功した。

あとは周りの研究者たちを殺せば少しの間は安心できると考え、周りの研究者を襲い始めた。

「ぐぐ！？」

まず手近にいた研究者を殴り飛ばした。

周りの奴らが茫然としている間に何人仕留められるかが勝負だ。

それにしてもただ殴っただけで手がかなり痛い。少し力を加減する必要があるそうだ。

これが生身の体なのかと実感しながらも、前の体はどんなに強力だったか改めて思い知った。

「一旦引け！ そうしたらこの空間に催眠ガスを……」

その言葉の続きを研究員が言うことはできなかった。なぜなら少年がその男の顔を殴り、吹き飛ばしたからである。

今は手の痛みを気にしていられる状況ではないので、今出せる限りの力で周りの研究員たちを殴った。

すると周りの研究者たちも状況が判断できるようになって来たのか、逃げて行く奴らがほとんど、いや全員だった。

ここで魔法は使えるのかどうかを試して見ようと思った。

最上級魔法術を使えばほとんど敵なしということはあるが、ここで使って異変に気が付いたやるが、違うフロアから増援が来ると厄介なので、下級魔法術を使えるか試して見ることにした。

「ロアグレイデ 下級魔法術 ディフジオン 分裂魔法 『クインティル 五本の棘』」

紫色の小さな魔法陣が5つ目の前に現れ、魔法陣の中心から緑色の光線が5本飛んでいき逃げようとしている研究員たちに向かい、その胸を貫いた。

研究員たちは悲鳴をあげる暇もなく、口から血を吐きだしながら絶命した。

「とりあえず……だな」

戦闘したというのに、自分の意識が保てていることに少々違和感を感じながら少年は息をついた。

「さてと、ここからどうしようか……」

とりあえず最初にやることはこの研究施設から脱出することだとは決めていたが、少年は折角過去に戻って来たのだから、他のことをやってから逃げるというのも手だと思っていたのだ。

このまま1人で脱出するのもいいが、過去の自分と同じような目にあっている人はたくさんいたはずなので、その人たちを助けてから脱出するのでもいいかもしれない。

少年が色々と悩んでいた時にいきなりガコン！ と音がして、何かが動いているような音が鳴り響いた。その音は研究員の死体がある少し先の壁から鳴り響いていた。

「おいおいおい！ なんじゃこりゃあ!？」

壁から少し低めの声が聞こえた。

「まさか、実験が失敗していたとは……面白い！」

壁がぐるりと反転して、そこから普通の人より一回りくらい大きく、やたらと筋肉質な男が出て来た。

「そこが隠し扉だったわけか」

「なんだよ、俺には目もくれないってかあ？」

男がにやにやしながらこちらへと距離を詰めてくる。

「にしても、間抜けな奴らだよな！ こいつら研究材料に殺されたんだぜ？」

「全くその通りだ」

筋肉質の男が死体を見て言うと、後ろから無愛想な男の声が聞こえた。

もう1人いるとはわからなかったので、少し驚いた。

しかし、姿は見えていない。

「お前は上にこのことを報告してこい。俺はこの材料を廃棄するつてな」

「わかった」

そう言つと無愛想な声の男が後ろの隠し扉に向かう背中だけ少し見えた。

背が低く、帽子を被っていることしか見えなかった。髪の毛がはみ出ていなかったの、そんなに髪の毛は長くないようだ。

そしてなぜか目の前の男は自らの上着を引きちぎった。腹筋が割れている。

「それじゃ、てめえには死んでもらおうか!!」

筋肉質の男が少年に向かってかなりのスピードで向かってくる。と言っても前の世界にいた少年とは比べ物にならないほどの速さだが。少年の反射神経は引き継がれていたようで、その動きにはちゃんと対応できた。だが、体の動きは前の世界よりは遅くなっている。で少々危なかった。

男は少年の顔を狙っていたようなので体を横にずらしてかわし、そこから男の腹に向かって殴り、その瞬間後ろにバク転して距離を取った。

今回は様子見という感じで全力の力では殴らなかった。

「ほうほう！ 結構やるようだな！ 俺の予想では今の1撃で終わっていたんだがな。それに、今の拳結構効いたぜ」

そう言いながら男は笑っていた。戦いを楽しんでいる様子だ。

「まあまあ出来るようだし、本気でいつか!」

先ほどこちらに向かって来たときと同じくらいの速さで男はタックルする形で突進してきた。

このまま後ろに下がって避けることは難しいので、横にずれて回避。そこで魔法を使おうとしたが、男が早くて呪文を唱えることが出来ない。

魔法にも弱点があるのだ。

それは近くの敵には当てることが難しいことと、威力が高ければ高い程使う前と使ったあとに出来る長い隙だ。

それに、魔法を唱えている間はほとんど動かないことが原則なのである。なぜならば、移動しながら使おうと詠唱に集中できずに威力が落ちるからである。

あと魔法を撃った後には少し反動があり、それも大きな隙になりかねないのである。

つまり相手が移動に特化している場合ほとんど魔法を使うわけにはいかないし、移動しながら使った所で当たらなければ意味がないし威力も落ちるので基本は接近戦になる。

なので基本魔法使いは後方支援としてしか戦闘には参加することではなく、接近戦で魔法を使う者はほとんどいない。

「面倒な」

「は！？ お前まさかこの俺に勝つ気でいるのかよ！」

返事はしない。

身体が人間に戻ったので、体力は底なしではなくなったからである。

一々返事を返した所で生き残れる可能性が高くなることなんてないだろうから。

とは言っても話をしても無駄ではないところでは話すだろうが。

「こんのおおおおおおおお！！！」

男が気合いと共に少年に向けて回し蹴りをした。勿論反応することとは容易だったが、やはり体が付いてこない。それでも躲すことは出来たので男は少年に対して隙を作っただけであった。

今度はお返しとばかりに少年が回し蹴りを男の腹に打ち込んだ。しかし、その瞬間おかしなことが起きた。逆に少年が吹き飛ばされて床に打ち付けられたのだ。

打ち付けられた瞬間に追撃されると思って、すぐに床から痛む体

を起こし男の姿を確認した。

男はにんまりとした顔で少年を見ていた。

今の反撃によって男は少年から主導権を取ったと思っているらしい。

「……お前まさか反射使用カウンターか？」

「よく知ってるじゃねーか……」

男は少年に自分のことがばれてにんまり笑いが消えた。

反射使用カウンターとは防御魔法を相手の攻撃が当たる瞬間に使った時に起こる反射物理攻撃防御魔法術（元の攻撃の2倍の威力が相手に跳ね返る）を使える人のことを言う。

防御魔法は魔法使用者の前に見えない盾をだす呪文である。

もちろん防御魔法を攻撃が当たる前に使っておいて相手の攻撃を防ぐことも出来る。

防御魔法は呪文を唱えないで使えるので、便利である。

一見防御魔法はかなり優れた魔法にも思えるが、この魔法には落とし穴がある。防げる力よりも大きな威力の攻撃を食らうと当然だが一防御魔法（見えない盾）は砕けてしまう。

防御魔法は砕けるとすぐさま周囲の物と同調して、再び見えない盾を作ろうとする性質がある。これが厄介なのだ。

破壊された盾の1番近くにあるものは、盾を破壊した物であるからその破壊した物に同調しはじめてしまうのである。

そうすると防御魔法を砕いた攻撃に防御魔法の力も加わって自らに襲いかかって来るのである。つまり防御魔法で防げなかった攻撃は、さらに防御魔法での力も加算されて襲ってくることになってしまうのだ。

それに防御魔法は消費する魔力の量が多いので、後方支援の普通の魔法使いはあまり使うことはない。

接近戦を主体としている者にとってはかなり使い勝手のよいものになる。魔力の消費を気にすることなく戦えるというのが理由の1つだ。

ちなみに魔法を反射出来たとしても、魔法自体に威力が跳ね返るだけで相手にまで攻撃が跳ね返らないので意味がない。

「お前は最初の1撃を防がなかったのはわざとか？　それで俺が油断したときにこの防御魔法の反射使って一気に畳込む気だったのか？」

「よくわかるな。だが1撃目は本当に受けたのさ。防がなかったのではなくて、防げなかった」

少年は男が答えを教えてくれるので自分が言ったことが正解だということがわかった。もしかしたら、少年を勘違いさせる為に嘘をついて言っているかもしれないが。

少年は体を起こしながら自らの身体の痛みに苛立った。昔ならばこんな衝撃はすぐに治ったのだが、今は人の体なのでそうもいかないようである。

それに自分の攻撃力の倍のダメージを食らったので、人間の体では少々堪えた。

「なるほど。防げる場所が一定でないというならば最初から俺の攻撃を防いでいたと。ならお前は1部分しか防御出来ない下級の防御魔法しか使えないってわけか？」

「何もかもお見通ししてわけか。てめえ何者だ？」

「さあな。未来から来た化け物って感じかな？　にしても、魔法を使える奴だったとは思わなかったぜ」

魔法は何もしないと使えない。だが、魔法を絶対に使えない人間はいない。ただ使えるように努力しないだけである。

なぜなら、魔法を使えるようになるまでは本当に大変な練習をしなければいけないからである。

魔法は1年2年と鍛えていくとやっと下級魔法が使えるようになる程度である。それも最初の方の威力は壁を少し焦がすくらいの威力だ。

そこからさらに鍛えていくと中級、上級魔法と使えるようになっていくのだが、ほとんどの人間は魔法を使えるようになるまでは鍛えない。なぜなら初めて魔法を使えるようになるまで最低でも1年間は必要とするし、実践で使えるようになるのはそこからさらに4、5年は鍛えないと戦闘では使えないからである。

少年は前の世界に居た時に無理矢理魔法を使えるようにされたので、苦労を知っている。なので目の前にいる男が魔法を使えることに驚いていた。

「お前みたいな筋肉馬鹿には、魔法は必要ないようにも見えるんだがな」

「ふざけやがって!」

男が再び少年に向かって突進してくる。体は痛いが、動かせない程ではない。

「さあどうする!?! お前の攻撃はもう効かないぜ!?!」

「言っておくが、お前だけが防御魔法プロットを使えるってわけじゃ、ねえんだよ!」

男が少年にぶつかる瞬間に男は逆の方に吹き飛んだ。少年も男に対して反射物理攻撃防御魔法を使ったのである。

「な、なぜ……俺はお前の複数箇所**に**ぶつかったんだぞ」

「絶対不可侵の領域。お前は俺の領域に踏み込んだ。ただ、それだ

けだ」

セニオード

「上級魔法術だ！？ それに、俺の攻撃を防いだ……な、なんでお前みたいな小僧が……」

「子供だと思つて、油断したか？」

「くそがあああ！！」

男は喚きながら少年に殴りかかる。しかしその攻撃はやはり当てることなく逆に少年に反撃されてしまう。

そしてそれを男が反射物理防御魔法で跳ね返した瞬間にまたおかしなことが起きた。

反射物理防御魔法術で跳ね返したはずの少年の攻撃の威力が、倍以上になって自分に跳ね返って来たのである。

男は衝撃で地面に転がり、尻餅をついた状態で少年の方を見ていた。

「げほ……な、なんで跳ね返らねえんだ……」

「その反射物理防御魔法術をさらに反射物理防御魔法術で跳ね返したんだ。まあ、難しいからお勧めはしないけどな」

通常反射物理防御魔法術をさらに反射物理防御魔法術で跳ね返すなんてことはありえないのだが、少年の前の世界で鍛えた反射神経がそれを可能にしていた。

男は尻餅をついたまま後ずさった。それが命取りと知らずに。

少年はチャンスとばかりに魔法を詠唱する。

インタデメリー

「中級魔法術

ディブシオン

分裂魔法

ウンデカル

『十一の剣』

」

白くて縦に長く、四角形な魔法陣が少年の目の前に現れてそこから11本の白い何かが男に向かって発射された。

「うわあああ！ くそつたれが！」

男は急いで立ち上がり、後ろに逃げながら1本2本の攻撃を防御魔法で防いだようだが、それ以外は防げず、自らの体に魔法が突き刺さり床に倒れた。意識を失ったかどうかはわからないが、かなりの深手を負ったのは間違いなかった。

「おかしいな……魔法の威力が前よりも下がっている？ ……とりあえず、他の応援が来る前に、脱出するでしょう」

少年はとりあえず、ここから逃げ出すことにした。

2話（前書き）

遅くなつてごめんなさい

2話

少し床に打ち付けられただけで痛む体に苛立ちを覚えながら少年は周りを見回した。

少年はさっき倒した筋肉質の男がさっきここに来る前に帽子を被った男に言った言葉を思い出していた。

確かあの時は男が帽子男に俺はこいつを殺すからそれを伝えてこいという感じのことを言っていたのでしばらくの間はここに居ても大丈夫だろうと思った。

しかし、あまり長くいることは出来ないだろう。あの帽子の男だって時間が経って筋肉質の男が帰って来なかったら怪しく思うだろう。

この部屋から出る場所はわかっていたが、他に何かないかを探していた。

あそこから普通に通ってもいいが今地面に倒れている男がそこから来たことを考えると、あまりそこから通りたくはなかった。

こいつが現れたのは隠し扉らしき壁からなので、他にも扉がないかを探すことにした。体が痛んでいたので、少し壁によしかかる感じになっていた。

「無駄だ」

さっき倒した筋肉質の男が話しかけてきた。どうやら意識は失っていないかったらしい。

「なんだよ」

「他の扉を探しても無駄だと言ったんだ」

「そうかい。って俺に教えてもいいのか？」

「やられた身だからな。もう動けやしねえよ」

男はそういいながら顔だけを前に向けた。

「それより、俺には止め刺さなくていいのか」

「ああ。お前には特に恨みがあるわけでもないからな」

「こいつらには何か恨みがあつたのか？」

こいつらというのは研究者たちと予想して答える。

「ああ、こいつらは俺を酷いめに遭わせてくれたからな」

少年は男の言葉を信用していないかのように壁を入念に調べていた。

「お前……」

「なんだよ」

「まだ脱出諦めてねえんだったら、さつさと俺が来た所から逃げやがれ」

「うるせえな……人のことは放っておいて、自分のことでも心配してやがれ」

本来ならば意識を失ってもおかしくない程のダメージを負っているはずなのだが、床に倒れている男は自身のかなり質のいい筋肉のおかげで致命傷にはならなかったらしい。

「ここがどこだかわかってんだろ？ 奴隷収容所って名前だが、本

当は人体実験をしている施設で――」

「ロアクレイデ ストレート センチタリム
黙れ。下級 直線魔法 『貫く槍』」

少年が手を床に倒れている男に向けると素早く黄色い小さな魔法陣が現れ、男の方に1本の短い光線が男の頭の少し前の方に突き刺さり、その衝撃で男はまた吹き飛ばされた。

「うおおおお！？」

「ちっ……はずしたか」

「容赦ねえな！？」

「敵に容赦しない奴なんているのか？」

「それも……そうか」

「ああ、お前言いかけてたことだが。俺は全てを知っている。ここが人体実験場だってこともここを作ったのが聖都アクナシヤだってこともな」

「……それで、めえはどうするつもりなんだよ」

「とりあえずここからは脱出する。それからには特に考えてないし、考えていたとしてもお前なんかに教えねえよ」

「それも……そうだな」

少年は何か自らの拳と魔法以外の武器。剣などが欲しくなった。いくら下級魔法だからと言って、何回も使っていたら魔法使う力がなくなってしまうし、少年は格闘よりも剣術の方が得意なのである。

一通り隠し扉以外の壁を調べたが、特に変わったものはなく時間の無駄だったらしい。

「正面突破しか道はないのか」

「だろうな。めえの命もきつとそこで終わりだ」

「お前が俺の運命を決めるなカス野郎。悪いが俺はまだまだ死ねない身なんだね」

少年は隠し扉を通り進んだ。

男は後ろの方で何か言っていた気がしたが、特に気にもしなかった。

進んだ先にあったのはエレベーターのような物で、ボタンを押せばその場所まで登って行くことが出来るらしい。

階数を確認しようと、上の方を見ると数字が21までであった。しかし順番は番号順ではなく、ばらばらだった。

「……どこが出口なんだ」

ここの階は15の数字が見えるが、実際は15階なのかどうかも怪しい。なぜなら、次の階は3階だからである。

「仕方ないから適当に行ってみるか」

多分1回このエレベーターを動かしたとしても少年を殺そうとしていた男が動かしているのだと思って、特に気にもされることなく少年はエレベーターを使えるであろう。

少年はエレベーターに乗り込み、適当に次の階の3を押した。

するとエレベーターは少し上に動いてから横に動いて、そこからさらに上に進み始めた。

横に移動するとは思っていなかったので、少年は若干よろめきはしたが、転ぶことはなかった。

「まさか、横に動くとは思わなかった」

しかも1つ上の数字を押しただけで横に動いたり上に2回も動い

ている。昔はこんな所をどうやって通っていたのかも少年の記憶にはない。

ガクン！ と音がして扉が開くのかと思いきや、今度は下に降下する感じがした。

チーンという音がして、今度こそ扉が開いた。

エレベーターを降りた部屋に出口らしきものが見当たらなかった。周りにはただ剣や銃などが置いてある。多分武器庫か何かなのだろう。

少年は普通の状況だったならば喜んだ。自らが欲していた剣がそこには揃っているのだから。

しかし、そこにはそれ以外のいらない物まであったので、少年は素直には喜んでいる暇もなかった。

なぜなら、武装した兵士らしき奴らが少年の方を見て武器を構えて待っていたらしい。ほとんどの兵士が銃をこちらへ向けている。

「……へ？」

「実験体152、戦闘部隊の副長からお前が逃げ出したと連絡を受けて、貴方を処刑しに来ました」

「……嘘だろ」

兵士たちの代表らしき奴が1歩前に出て少年に宣言した。

副長というのはさっき倒した男だろうか？ と少年は疑問に思った。もしそうならば、止めを刺しておけばよかったとも思った。

ざっと兵士の数を数えると大体20人以上はいるようだ。しかも相手は武装しているので素手でダメージを与えるのは難しいだろう。兵士の中に剣を持っている兵士がいたので、奪い取りたいと少年は考えていた。

後ろの方に立てかけてある剣を取りに行く暇はないと思っていた

からだ。

「実験体。抵抗しないのであれば、楽に死なさせてやるぞ」

「……1つ聞こう。エレベーターを弄ったのは貴様らか？」

「勿論そうだ。あの装置が我らが操作しないで、あんな動きをするわけないだろう」

つまりこの兵士たちを全て片付けてからではないと、先には進めないということであろう。

「わかった。ならば、死んでもらおうか」

「！！」

少年はその場で静止したまま手を兵士の方へと向けた。

インタデメリー ストレート
「中級魔法術 直線魔法 『絶望の闇』」

「まずい！ 撤退しろ！」

少年の手のひらから黒い紋章が浮き上がり、紋章から暗い闇が溢れて部屋全体が闇に包まれていく。

「うおおおおおおお！！！」

やけくそ気味の兵士5、6人が自らが武装している銃で闇に向かって撃っているが、全ての弾が吸収されるだけで闇の勢いは止まらない。

「無駄だ。魔法に対抗するには、もっと強い力じゃないと」

「無茶だ！ 魔法が使えるだなんて、報告にないぞ！？」

兵士たちは成すがままに闇に飲み込まれていき、悲鳴をあげたりするだけで、少年を処刑しに来ている者たちとは到底思えなかった。少年の心の中に、もしかしたら自分の情報が正しく伝わってなく、わざと魔法を使えない奴らだけで来た。という考えがだが油断はしなかった。

「早く魔力拡散弾を撃て！！」

そう兵士の代表らしき人物が回りに指示をした。

代表というより、周りに命令を下したりもしているのでリーダー格とも言った方が良さそうだろうか。

兵士たちが少年の放った魔法に魔力拡散弾を撃ち込んでいくと、段々と魔法が分散していった。

「ああ」

少年は思い出したように言った。

「そういえば、昔魔法も使えない凡人共が魔法使いに対抗するために作り出した兵器つてのがあったな」

「貴様……！ 我らを愚弄するか！？」

「いや。そんな奴らの無駄な足掻きを思い出して憐れんでるんだよ」
「この……クソガキがああああ！！」

リーダー格の兵士が俺に向かって銃を撃ってくる。

もちろん魔法でガードすることも出来るだろうが、防ぐ必要もないので躲すことにした。

「んな……銃弾を躲しただと？」

「そんなことに一々驚いていて、隙を作っていないのか？」

「!？」

と声では余裕そうに装ってはいたが、実際は反応出来ていても体が付いてこないのが、ギリギリ躲けたという感じであった。

リーダー格の男が茫然としている間に少年はもうその男の隣にいた。

そして少年は男の顔面を思いっきり殴り飛ばした。

「ぐああ！」

ドン！ と男は壁にぶつかり気を失ったらしい。だが、少年はまだ攻撃をやめることはない。

「ログアデーレ 下級魔法 ストレート 直線魔法 センチタリム 『貫く槍』」

ひゅんという音が聞こえたかと思うと、リーダー格の男が気を失っている方に向かってさらに魔法が放たれていた。

「そんな！ 長！」

「なんでだよ……なんでそんなに容赦がねえんだ！」

さっきまで多数対1で少年を処刑しようとしていた奴らが言う言葉ではないような気がするが、少年は黙っていた。あとは残りの2、3人の兵士を倒せば終わりである。

少年はまず剣を持っている兵士を狙った。

少年の移動スピードは前の世界の時より落ちているとは言え、一般の人間から見ればかなり速いので兵士たちは動きに付いて行くことが出来ない。多少訓練しているとはいえ、前の世界の少年と比べれば全くしていないと言っているほどだろう。

剣を持っている兵士の脇腹を殴ると、呻きながら倒れ兵士は剣を地面に落とした。それを少年が軽々と拾う。

「うーん。久しぶりの剣だな」

少年の興味は剣の方に向けられて、まるで周りにもう敵はいないかのように振る舞っている。脇腹を殴られた兵士はその場に蹲うすくまっていた。

「切れ味はどんなものなんだろうか」

少年はまるで日常の中にいる害虫を殺すかのように、何のためらいもなく近くにいた兵士の首を斬り飛ばした。

「え……」

残っていた兵士が思わず声にだしていた。

「うーん。まあ一般の兵士が持っている剣だし、これくらいの強度なのかなあ……」

少年が振った剣をよく見ると若干だが剣が欠けていた。

「さて、と」

「うわあああああああああ!!」

少年の言葉を聞いて次は自分だと思った兵士が発狂しながら銃を乱射した。少年は慌てず自分にあたる弾だけ剣で弾き、兵士に近付いていた。

そして兵士が銃を両手で構えているので下から上に向けて剣を斬

りあげて兵士の手を斬り落とした。

「あ、ああああ、ああああ――！」

自らの手が斬られた衝撃と感覚で情けない声をだしている兵士を少年は構わず蹴り飛ばした。蹴りの威力はそれほどなく、兵士を黙らせたただけであった。

だが少年はそれで満足したようで他の兵士がいなか周りを見回した。

「あれ？」

少年の感ではあと最低でも1人の兵士がいたはずなのだが、なぜか兵士の姿が見当たらなかった。

もしかしたら、最初の闇の魔法に吸い込まれてどこかへ消えてしまったのかもしれない。

これで少しゆっくり剣を選べるなど思いながら少年は剣がある場所へ歩いていった。

ほとんどの剣が自分が放った魔法で折れたり、砕けたり、中には消滅しているものもあったが、ちゃんと形を保っている剣がたくさんあった。

今少年が手にしている剣も兵士が持っていたので、結構良い剣なのだろうが、たった1撃で欠けるような剣はあまり役に立たなさそうだったので、変わりの剣も探しておくことにした。

前の世界ならば、剣を5本程度背負っていても全くと言っていいほど影響がなかったが、今の状態では2本背負うのが限界だろうと思ひ、少年は適当に剣を1本背中に背負った。

この中にあるものならば、大して1本1本に変わりはないと思っただからである。

と、少年が剣を背負って歩き出した瞬間少年は地面に倒れてしまった。

先ほどの男との戦いで受けた反射物理防御魔法術で食らったダメージがかなり残っていたようだ。

「やっぱり……自分の力は痛いな」

少年は負担を少しでも減らすために背中に背負った剣を壁の方に投げて捨てた。

折角拾ったのに、と少年は思ったが自分の体の方が大事なので仕方なくそうした。

そして、少年はゆっくりとエレベーターの方に戻って行った。

3話 連れが1人増えた（前書き）

今回は書きたかった話の1つなので、ちょっと長いかもね

3話 連れが1人増えた

「待てよ……」

少年はエレベーターに乗ろうとしたが、足を止めた。

「このまままたエレベーターに乗ったら罠に仕掛けられるとか、そういう感じなのか？」

でもさっきは連絡がいつて、兵士たちがこちらに対して仕掛けて来たのでまた兵士がやられるなんて思っではないはず。

それなら今度こそ1回くらい弄っても大丈夫ではないかと思い、少年はエレベーターの中に入った。

だが入ったと同時にエレベーターが勝手に動きだした。

「やっぱり、そういう感じなのかねえ……」

少年は諦めたように独り言をいった。エレベーターはどんどんと上に向かってあがって行く。どうやら行き場所は上の階らしい。

エレベーターの中ではガコンガコンという音以外は何も聞こえず、突然どこからか攻撃が飛んで来るなんてことはなさそうだった。

それでもいきなり攻撃が来ないという保証はないので剣は手に持ったままにしておいた。

「お」

チーンという音がして扉が開いた。どうやら目的の場所に着いたらしい。

少年がエレベーターから降りるとまた大きな部屋だった。

そこは少し前2部屋とは違う感じだった。

部屋の周りには水槽があり魚が泳いでいた。

そして部屋の奥には手を鎖で縛られ、磔られている少女がいた。体はあちこち汚れていて、髪が銀髪。結構少年と距離は離れていた
ので、その他詳しいことはよくわからなかった。

「美しいだろう?」

「!?!」

少年が声のした方を向くと水槽のある所に寄りかかっている男がいた。

紅いメガネを掛けて、少し黄色めの髪。服装は全て黒く、コートが摩^{なび}いていた。

風もないのにどうして? と少年は思ったが、とりあえず目の前にいる怪しい男を警戒していた。

「あの少女は精霊魔法使いだ。手に入れるのに苦労したよ」

「……」

「無視か。それもいい。ただ黙って聞いてくれるだけでもね」

少年は目の前の黒い男を警戒しながらも話に耳を傾けていた。

「実験体152、君は実に面白い」

男がぱちん! と指を鳴らすと鎖で縛られている少女の上の壁がずれて、画面が出て来た。

「このモニターから君を全て見ていたよ。いきなり研究員を殺しはじめたり、一応ここの戦闘部隊の副隊長を圧倒する姿も……ね」

「あんな奴が戦闘部隊の副隊長とは、笑わせるよ」

「君からしたらそうだろうね。にしても、本当に君は面白い。魔法の力にしても格闘にしても全てが私の予想以上だ。一体何時^{いつ}そんな技術を手に入れたんだい？ 私が見ていた中じゃ君はここに来るまでは全くと言っていいほど力がなかった。なのに君はいきなり力だけで鎖を引きちぎった。魔法も使った。なぜここに連れて来られる前から使わなかったのか、それとも使えなかったのか。疑問は山ほどある」

「さあな。未来の俺からの、贈り物かもな」

「未来の君の力かい？ ククク……面白いことを言うじゃないか」

「ここには俺以外にも子供や実験対象が、いるんだろ？」

「正しく言うならば、この近くだがね。この精霊魔法師の少女もその1人だ。中々ガードが硬くて困っているのさ」

「……そうか、で、この部屋に俺を連れてきたのはお前なんだろ？」

「直接会って話して見たかったからね。君は期待通りだった」

「話すだけが目的だったなら、もう出て行ってもいいか？」

「それは困る。君は私達にとっても重要な存在だからね。大人しく改造されないか？」

「お断りだ、糞野郎」

「それなら仕方がない。力で支配させてもらうよ」
「！」

黒い男がそう言った瞬間にはもう少年の後ろに来て蹴りの構えを取っていた。少年はその蹴りを反射物理防御魔法術で跳ね返すことにした。

「かあっ！」

男が掛け声とともに蹴りを放つ。タイミングよく防御魔法を発動。だが衝撃が来ない。不審に思った瞬間に衝撃が来た。しかし自らの体に蹴りが当たる衝撃だった。

「……っ！」

蹴り飛ばされながらも体制を整える。

そして自分の防御魔法が相手のただの蹴りで破られたことに驚いた。

「ふむ……その対応速度も素晴らしい。だが、まだ私でも勝てそうだな」

「何しやがった……」

「君が反射物理防御魔法術で攻撃を跳ね返そうとしていることはわかっていて。だからタイミングをずらして君の防御魔法を貫いて君にダメージを与えただけさ」

「ただの打撃で上級魔法が壊されるのか……？」

「そこらを理解していないところを見ると、まだまだだということだね」

「っ！ 黙れ！ エクストラ 最上級魔法術 ストレート 直線魔法 『キサグラム 六芒星』 ！！」

「ほうっ！」

「んな！？」

少年は驚いた。

何に驚いたかというと自身が放った最上級魔法に。

なぜかと言うと前の世界で使っていた魔法の大きさの、約半分く

らの大きさになっていたからである。

これでは前の世界にいた時に使っていた上級魔法より少し力が大きいくらいである。

「んん？ 驚くということは、予想外の何かが起こったようだね。
でも、ここからがさらに予想外だと思うよ。 下級魔法術 ロアグレイデ 直線魔
ストレ
法 セントタリム 『貫く槍』」

男は少年の言葉を聞きながら、最上級魔法に対して下級魔法で対応した。

少年は例え少し力がなくなったからと言って、最上級魔法が下級魔法に負けるとは思っていないので、少しだけ気を緩めた……のだが。

「！」

少年の最上級魔法は男の放った下級魔法によって貫かれていた。そしてその魔法は最上級魔法を貫くだけではなく、少年を貫く勢いで体の中心へと飛んで来ていた。

慌てて身を横に移動させようとするが、最上級魔法を使った反動で少し体の動きが鈍かった。が、なんとか中心に当たることはなく、左肩を貫かれただけで済んだ。

少年の魔法と男の魔法を比べると男の魔法の方が圧倒的に小さいので、少年の魔法は貫かれていない場所もある。ただ男は無傷でそこに立っていた。男の後ろの方で少年の魔法が壁にぶつかり壁を壊した。どうやらこの部屋の壁は魔法耐性があるようで少ししか壊れなかった。

「まさか最上級魔法が下級魔法に貫かれるとはな……」

「君の魔法には多少だが弱い所が見えるのでね。そこを突けば簡単にいなすことが出来る。力だけが全てではない。小さき力でも1点に集中させれば大きな力となる」

「なんだよそれ、アドバースか？」

「似たようなものさ」

どうやら前の世界よりもかなり魔法の力が弱くなっているらしい。少年は魔法では目の前の男には勝てないと思い剣で戦うことにした。

「今度は剣か。とことん付き合ってやろう」

男も見えない所から黒い剣を出した。

何かカラクリがあるのかもしれない。もしくは、この世界では自分でも知らない魔法があるのかと色々と疑問に思うこともあったが、目の前の男に集中することにした。

「はあああ！！」

「むん！！」

少年の横からの重い1撃を男が黒い剣で受け止める。少年は片手で剣を持ち、男は両手で剣を持っていた。

少年は力を込めて男をそのまま斬り伏せるつもりだったが、男の方が力が強く、逆に押され気味だった。

少年はこのままだと勝てないと思い、力を抜いて下がった。そして男が少し前へ乗り出す瞬間を狙い剣で首を狙い斬りつけた。

ガン！ という音が鳴り少年は後ろへと吹き飛ばされた。

吹き飛ばされている時に、自分は反射物理防御魔法術を食らったのだと悟った。剣は碎けてしまった。

しかし剣だけが反射物理防御魔法術に当たったので、体にはそれほどダメージがなかった。

「中々いいが、私もこれくらいなら使えるということを忘れて貰っては困る」

少年は息が切れていた。

男と戦う前にも少し攻撃を食らっていたし、ここに来て生身で攻撃を2回程受けていたのも原因だが今の少年の体は体力が少ないのである。

16歳の平均的な体力はあるものの、生身になったことで攻撃で痛みを感じるといふ緊張感がかなり神経をとがらせていて、さらに体力を削っていた。

さきほど魔法で貫かれた左肩は当然だがかなり痛んでいる。

「休んでいる暇はない」

「!？」

少年は男の様子を窺っていたのだが、男の速さが少年よりもかなり速く反応することすらギリギリだった。

いきなり目の前に現れた（ように見えた）男が蹴りで少年を蹴り飛ばした。なんとか手でガードすることは出来たが、防御魔法を出すことまでは出来ず吹き飛ばされて鎖で繋がれている少女がいる上の方の壁にぶつかった。

「くそ……体中の痛みが消えないってこんな——」

ロアグレイデ デイブシオン クインティル
「下級魔法術 分裂魔法 『五本の棘』」

「うああああああ!!」

壁にぶつかって止まっているところに男が魔法で追い打ちを掛け

てきた。

少年は体を捻って躲そうとするが相手の魔法（5発飛んできている）を全て躲すことは出来ず、片足に2発食らってしまった。

「うぐ……」

そして上の壁から下の床まで少年は落ちてしまった。防御魔法を使おうとしたがうまくいかなかったようで、かなり体のダメージが酷かった。

男が少年のすぐ前に立っていた。少年はうつ伏せに倒れたままである。

「そろそろお休みの時間かな？」

「ふざけんなよ……三下があー！」

「ふむ、そう言うなら私を倒してからにしたまえ」

魔法が当たらなかった方の足で勢いをつけて男に向かって体当たりしに向かう。そんなことをしても無駄だとはわかっていたが、体が痛くてそれしか出来なかった。

「ただ直線に突っ込んできても当たらんぞ」

男は横によけて少年をかわす。

ここまで予想していた少年は男のいた場所で自身の体を止め、そこから回し蹴りをした。

「むうつ！」

男はこれが予想外だったらしく、蹴りを受け止め自分から距離を離してくれた。

少年は手を男の方に向けた。これが最後のチャンスだな、と思いつながら。

「エクストラ最上級魔法術 ストレート直線魔法 『キサグラム六芒星』！」

呪文を唱えた。

が、手のひらに紋章は出ない。

「!？」

「ははははは!! 君にも限界があるんじゃないか! どうやら魔法を使えなくなってようだね」

終わった……。

少年は悟った。

またあの世界のように精神が狂うんだ。そしてまたこの世界も元の世界のようになる……。

結局ここに帰って来た意味はなかった。元の世界で死んでいた方がましだったかもしれないという考えが少年の心を支配していく。

「そろそろ寝たまえ。君は十分にやった」

いつの間にか周りこんでいた男に後ろから蹴られる。身構えていなかったたので人形のように吹き飛ばされた。

そして少女が鎖で縛られている近くまで来て、やっと止まった。これで体が全く動かなくなった。意識はあるが、何も出来ないことには変わらない。

「回収班。私だ。すぐ部屋に来てくれ。あと清掃——」

男がどこかへ向かって連絡を取っているらしい。今となってはど

うでもいいが。

「諦めるの？」

かなり小さい声だった。それが少女の発した声だと気が付くのに少し時間がかかった。

「諦めたくはない。でも無理なんだ」

少年も小さい声でかえす。いや、小さい声しか出せないと言った方正しい。

「どうして？」

少女が聞き返してくる。少年は自分の状況を見てわからないのか？と少し苛立ったがこれが最後の会話となるかもしれないので、黙っていた。

「体が動かない」

「どうして？」

「見てみるよ……体中傷だらけで動きたくても動けねえんだよ」

「だから諦めるの？」

「……ああ」

「諦めちゃ駄目。諦めたらどうにかなることもならないよ」

「この状況で諦める以外の選択肢があるのか……？」

「信じれば、私が力を貸すことが出来る。だから、諦めないで」

目の前の少女が言っている言葉をなんとなくだけ信じたくなかった。

少年は自分の体を無理矢理にでも起き上らせようとした。

「だな……なんだかこのまま寝そべってるのは悔しいや」

「その調子。“光よ、彼を癒せ”」

光が少年の体を包んでいく。

「なんだ……これ？」

少年は自分の体の痛みが段々と引いていくのを感じた。体も少しずつ動けるようになっていく。

「ね。どうにかなったしょ？」

「ああ、お前凄いな」

「えっへん」

普通自分でえっへんなんて言うか？　と思い微笑んだが自分たちが置かれている状況が、そんなことを思っている時ではないということに気が付いた。

まだあの男はこの部屋にいるんだ。

でも、俺の傷が癒えたことにはまだ気が付いていないはずだ。

あの男は例え力のない物でも力をとどめれば固めれば強いとか言っていたことを少年は思い出していた。

今なら魔法も使える気はしたが、最上級魔法など使う気にはなれなかったのである。

どうせなら直前まで気が付かれないように下級魔法を使うことに決めた。

「ロアグレート ストレート
下級 直線魔法……」

小声で唱え、狙いを男の方へと向ける。

少年はこんなにかつそりと相手を狙うのは初めてだなと思った。

「『センチタリム
貫く槍』」

少年は魔法を出来るだけ集中して1点にとどめるよう意識した。

「ん？」

少年が魔法を放つといつもよりも小さく鋭い形をした魔法が男に向かって飛んで行った。

しかも速さがいつもの倍以上だ。

男が魔法に気が付いたかどうかはわからないが、少年の方へと振り向いたときにはもう男の胸を貫いていた。

「んが!？」

魔法は男を貫いただけではなく、さらに後ろの（恐らく）魔法耐性のある壁に穴をあけた。

「すげえ……」

男のちょっとしたアドバイスだと思っていたことが、少し集中してやっただけで威力がかなり上がった。

「まさか……まだ動けたとは……ぐっ」

「動けたのは自分の力じゃねえ。この子のおかげだ」

「なるほど……精霊の加護か」

男は苦しそうに仰向けに倒れていた。
胸を貫かれたのにまだまだ動けそうに見えて少年は身構えたままだった。

「お前が俺にアドバイスしてなかったら、俺は今殺されてたかもな」
「ふふふ……構わんよ。なぜなら私はお前を強くするのが望みだからな」

「なんだそれ」
「いつかわかる。それまで生きていることだな」

少年は今度中級魔法や上級魔法にも試して見ようと考えていた。
今あの黒い服を着た男にトドメを刺しに行くのもいいとも思ったが、何だか嫌な予感もしていたので少年は男は放っておくことにした。

「とりあえず、今度こそこんな所からおさらばだ。……とお前はど
うしたい？」

少年が少女に話しかけると返答がかなり早く返ってきた。

「連れてって」
「わかった」

少年は少女の鎖を手で引きちぎった。すると少女は床にペタンと座り込んだ。かなり疲れているのだろうと思って気にしないで鎖を取る作業に戻った。

が鎖を根本から切っても金属の輪は取れない。そういえば自分もこの輪は取れていなかったなと呑気に考える。

とりあえずここを出てから魔法で削り取ろうと思いエレベーターに向かおうとすると鍵が飛んできた。

「それで全員の鍵が外れる。さつさとはずせ」

「本当か？」

「嘘は言わない。それに、その手に嵌めたまま研究所を出られた方が困る」

「なるほどね……」

つまり周りの何も知らない、一般の奴らには知られたくないということだろう。

少年は自分の輪を外してから少女の輪も全て取った。

「立てるか？」

「立てない」

「……乗るか？」

少年が背を向けて少女を乗りやすいようにする。

「うん、でも貴方の服が汚れる」

「多少だ。気にするな」

「わかった」

少女は少年の首から手を回し？まった。少年はよいしょつと言いながら少女を背負った。

「軽いな」

さつき少女が施してくれた精霊魔法（多分）のおかげで体の状態が元の状態まで戻ったようだ。

少年がエレベーターまで戻ろうとすると少女に止められた。

「どうした？」

「そつちじゃない。こつち」

少女はエレベーターの方ではない、右の方向を指さしていた。

「本当か？」

「うん」

少年は少女の言葉を信じて右の方向へ進んでいく。だが、右の方向には水槽の壁しかない。

「ああ、1つ言っておこう」

少年が壁の方へ向かっていると男の声がした。

「まだ気失ってなかったのか」

「勿論この程度じゃ……ね。ただ君が私と戦おうとしないからこうやって寝そべっているだけさ。それで、君に1つ忠告しておこうと思つてね」

「なんだよ」

「ここからは十分に注意して行動するべきだ。君以上に強い者はたくさんいる。私より強い者だつてな」

「それはもう十分理解したつもりだよ……」

「ならいい。それと、一応名乗っておこう。私はラドンだ。また会おう、実験体152」

「会いたかねえよ」

少年は話を聞きながら壁の方まで辿りついたので、少女に再び聞いた。

「ここでいいのか？」

「うん。壊して」

「……辛いこと言ってくれるじゃないの」

この壁を殴って壊すには痛いだろうし、魔法で壊すにしても一苦
労するだろう。

でも壁を殴って痛い思いをするよりは魔法を使った方がいい気が
して少年は魔法を使うことにした。

インタデメリー
「中級魔法術 分裂魔法 、『十一の剣』」

今度は分裂魔法、またの名を複数魔法とも呼ばれる魔法で少年は
さつき放った魔法の威力をあげたように、これも威力を上げようと
したが、今度は1点集中ではないのでコントロールが出来ず、いつ
もとあまり変わらない威力だった。

「練習が必要だな……ん？」

壁に突き刺さった11本の剣は壁を裂いていた。そしてその先には
通路が見えた。

「ね」

「凄いな、お前」

少年は感心したように言いながらその通路へと向かって歩いて行
った。

4話

「そうだ」

「どうかしたのか？」

少年が少女を背負ったまま通路を歩いていると背中 of 少女が話しかけてきた。

「貴方の名前って、何？」

「名前……？ ああ、なんだっけかな……。ずっと実験体152とか152とかでしか呼ばれてなかったから覚えてないんだよな」

「そうなの？」

「そうなの」

「じゃ、私がつけてあげるよ」

「いや……いいよ」

「貴方は魔法も使えるし剣も使えるから、魔法戦士？ 騎士？」

「人の話を聞かない奴め……戦士のがあってるんじゃないか？ 俺は馬に乗ったりはしないし」

「じゃ騎士で」

「おいこら」

「魔法騎士……」

少年の背中で少女は名前を考えているらしい。

少年にしてみれば結構な迷惑だったりもするのだが。

「うん。貴方の名前はシキにしよう」

「騎士を逆にしてシキってか？」

「なぜばれた」

「おい」

「駄目？」

「いや……まあいいや」

少年——シキは気軽そうに言った。

「短くて覚えやすくていい……かな。お前の名前は何ていうんだ？」

「セシリア・テイスタ」

「セシ！？……と違ったか。悪いなんでもない」

「？」

シキは少女——セシリアが前の世界の女が言っていた昔殺してしまった女性の名前に似ていたので少し驚いた。

「あー。でここからどうやって進んでいくか知ってるか？」

「うん。真っ直ぐ進んで、落ちればいいの」

「落ちる？」

「行けばわかる」

「そうなのか」

シキはそう言われてから何も言わないで進んで行った。後ろにいるセシリアも黙って肩に？まったまま黙っていた。

しばらく歩いていくと通路の終わりが見えてきた。

「お、もうすぐか」

「そうみたい。下に気を付けてね」
「ああん？ うおっ！？」

気を付けてと言う意味が出口の近くまで来るまでよくわからなかったが、出口まで来たら意味がわかった。
通路の先は道がなかったのである。

シキはどうやってここを超えるのかと周りを見渡したが、向こう側に道は続いてないし壁にも隠し扉のようなものは見つからなかった。

「ここ……どうすればいいんだ？」

「簡単。落ちればいいの」

「は？」

「大丈夫。私が補佐するから」

「……信じるからな」

「任せて」

シキは思い切って通路から飛び出した。

前の世界の体だったならば、シキは普通に落ちても平気であっただろうが、今は状況が違う。

全ては後ろに？まっているセシリアに掛かっていると言っても過言ではないのだが、シキに？まっている手が少しギュッと強くなったので不安になってきていた。

大丈夫……なんだよな？

落下スピードがどんどん上がって行くが、まだまだ地面が見えてこない。

シキはいざとなったら自分で魔法を地面に向けて使って、止まれるかはわからないがやってみようと思っていた。

「ん？」

下の方を見ていると小さな点が見えて来た。きっと誰かいるのだろっと思いつつも面倒だと思った。

地面に無事に着地出来たとするのならそのあとすぐにそこにいる奴らと戦うことになるだろうからだ。

それまで悲鳴などはあげないようにして、出来るだ気付かれないようにしようと思った。

それにしても凄い速さで落ちているなあと呑気に考える。

このまま何もせず落ちたらきつとトマトが潰れたようになりそう
だ。

「そろそろかな。 “ 光よ、私達を保護せよ ” 」

セシリアがそう何かの呪文を唱えるとシキとセシリアの周りに少し
淡い水色の光が包み込んだ。

速度は全く変わっていない。

「え？ まさか、これだけ？」

「そっだよ？ 安心でしょ？」

「安心出来るかあああああああああああ！！！」

思わずシキは悲鳴をあげてしまった。

だが、下にいる人らしきものは見向きもしなかった。

ズドーンという音が響き渡り、シキ達が落下した場所はかなりへ
こんでいたが、シキ達は無傷だった。

「すげーな……精霊魔法」

「ぐっ！」

「いやだからそういうことは言葉にして表さないと思うぞ?」

セシリアは指をぐつとシキの顔の前に出していた。

「ってこんなことしてる場合じゃないよな」

上から落ちてくるときに見た人影は全て敵のはずなので、気を緩めてはいられない。

「ん?」

周りをよく見てみるとおかしい状況だった。

シキはまだ何もしていないのに、周りでは兵士らしき人たちが倒れているのである。

「もしかしたら、俺たちみたいにここから逃げ出そうとしている奴がいるのか?」

「わからない。でも好都合」
「だな」

ここからの道を確認してみると、この部屋の間口に扉があった。その扉を開けると通路に繋がっていた。通路は一本道のようなので、もしかしたらここを通っていけば兵士を倒した人に会えるかもしれない。

シキは進み始めたが、相変わらずセシリアを背負ったままである。もしこのまま戦闘をすることになったら若干辛い気がしていたが降ろす気にはならなかった。

さっきの部屋にいた男くらいの強さを持つ奴ならば、降ろさなければいけないだろうが。

「音が聞こえる」

「本当だ。誰か戦ってるみたいだな」

通路を進んでいくと扉があり、その向こうから音が聞こえていた。シキは戦っている人がどんな奴なのかわからなかったので、慎重に姿が見られないようにしながら扉を開けた。

扉の中では少し身長が大きい男が周りの人たちをどんどん殴り飛ばしていた。

偶に攻撃を食らったりもするが反射物理防御魔法術で跳ね返している様子だった。

と動きを観察していると、あることにシキが気が付いた。

それは、今戦っている男が先ほどシキが戦っていたやたらと筋肉が凄い男だったのである。

「……あいつ何やってんだ？」

「知り合い？」

「んー……。さっき殺し合いをした仲？」

「そうなんだ」

というより、なぜあの男が今動いているのかと云うことが疑問だった。

先ほどシキがあのお男に魔法を食らわさせてから、まだ1時間程度しか経っていないというのに、奴は見た目元気そうに動き回りながら戦っているのである。

「そんなことはどうでもいいか」

「うん？」

「なんでもない」

「？」

問題はあいつをどうするかである。

このまま放っておいたら周りの敵を全て倒して進んでくれるかもしれないが、きっとあいつだって倒せない敵がその内いるはずだし、それにあいつが出口に向かっていても限らないのでどうしていいかわからない。

「助けてあげたら？」

「ん？」

「あの人ピンチだよ」

「あ」

シキが再びあの筋肉男の方を見ると周りの人たちに取り押さえられていた。

あいつあんなに弱かったのだろうか？ とシキはまた考え始めた。さっき戦った時のダメージが残っているのではないだろうか。

「仕方ない。一応助けておくか。あいつくらいなら、きっと倒せるだろうし。中級魔法術インタデメリー 分裂魔法ディフシオン 『十一の剣』ウンデカル」

シキは扉から手を突出し、筋肉男を押さえつけている研究員たちに向かって魔法を放った。

放った直後に力を1点に纏めておく。ということを忘れていたのだ、練習しておけばよかったと後悔した。が、ちゃんと魔法は敵に当たったようで、研究員たちは倒れた。

「久しぶりだな。お前そんなに弱かったのか？」

「……誰かと思ったら、てめえかよ」

「おいおい、助けてやったんだから少しは感謝しろよ」

シキは話しかけながら男に近付いて行く。勿論警戒することを忘
れずに。

「……ありがとう」

「うお！？ 本当に言いやがった！？」

「なんだよ！ 言えって言ったのはてめえじゃねえか！！」

「いや、すまん。本当に言うとは思ってなかった」

シキは男の傍に寄って腰を下ろした。

なんとなくだが、男がこちらに対して攻撃してくると思えな
ったのである。

もし、攻撃されたとしても防御魔法を発動させたらなんとかなる
と思っただのも理由の1つだが。

「……お前、よく生きてるな」

「実際にそうになったけど、こいつのおかげで何とかなった」

そう言っただけでシキは後ろにまだ？ まったままでいるセシリアを指さ
した。

「むー、こいつじゃなくてセシリア」

「はいはい。で、お前に聞きたいことあるんだけど、いいか？」

「……セシリア？ お前……まさかあの人から逃げ延びたのか？」

「ん？ あーあの黒い奴？ 逃げれたけど？ ギリギリで」

「嘘だろ……あの人から逃げ切るだなんて……お前やっぱりなんか
おかしいぞ」

「そうですか。別にどうでもいいですよ。で、聞きたいことがある
んだが？」

「あ、ああ。助けられた身だからな。答えることなら答えてやるうじゃねえか」

「助かる。じゃ、一気に質問するから答えれる物から言ってくれ。まず、なぜお前はそんなにも元気に動いている？ 俺が魔法でなんにも串刺しにしたのにも関わらず無事で居られるのはなぜだ？ そしてお前はなぜ他の仲間から狙われている？ もしくは自分から敵対している？ そしてお前はこの研究室から出る場所を知っているか？ もし知っているのなら教えてほしい」

「本当に一気に来たな。まあ、全て答えられるから答えよう。まず俺が普通に動いているのは回復結晶おれいって言われているまあ、戦闘屋みたいなのにしか知られてないものを使ったからだ。そして俺がなぜ他の奴らを倒して行っているかというのは、俺がここから排除されようとしているからだ。そして最後の質問だが、もちろん知っている。俺は研究所こしよに勤めて結構経ってるからな」

男は全ての質問に答えた気でいるらしいが、シキは1番最後の教えてくれるか？ という質問を言っていないことに気付いていた。それに、新しいことも知りたくなかった。回復結晶とかと呼ばれる結晶（なのは定かではないが）のことだ。

前の世界ではそのような物は知らなかったし、それにこの世界で手に入れることが出来ればかなり有利になるだろうと思ったからだ。

「それで——ちょっと待った」

「あん？ まあ俺も少し休憩するとするか」

シキはこの男を利用出来ないかと考えていた。

先ほどまでは敵だったとはいえ、今この男との目的は同じだし、この男に付いて行けば何の罠にも嵌らずに出口まで行ける。

そこから先は考えていないが、出口までという契約で共に行動し

ていたら結構ここから楽に進むことが出来るはずだ。仮にもこの戦闘部隊の副隊長だったらしいので。

「なあ、俺とお前は目的一緒だよな？」

「まあ、そうなるな」

「ならよ、俺たちとこの研究所から出るまでいい。協力しないか？俺も結構強い方だと思っているし、役に立つと思うぞ？」

「……少し考えさせてくれ」

そついうと男はぼんやりと宙を見上げていた。

シキはそういえばこの男の名前知らないなーと、のんびり考えいた。断られた時にどうするかは特に考えていなかった。10分くらい経った後に男が言った。

「決めた。組もう」

「お、そう決めてくれると嬉しい。少し前まで敵だったが、ここからは一応仲間だな」

「ああ。よろしく頼む。俺はガスタス・ウェルマーだ」

「おう。俺は……えーと、シキだ。背中に乗ってる奴はセシリアだ。精霊魔法使いらしいぞ」

「そいつはつえーな」

「……」

「？」

後ろからの反応がないので、少しシキは不審に思ったが気にしないことにした。

隣にいた男はガスタスと名乗った。

シキは昔にもこんな名前の奴がいた気もしたが、忘れることにした。

「さてと、それじゃあ行きますか！」

ガスタスは立ち上がった。

シキも従ってゆつくりと立ち上がる。

「ここからどうやって進んでいくのかは全てお前に任せる。頼むぞ」
「わかった。奴らが来たときは頼りにするぜ。それに、まだあいつがいるからな」

「あいつ……？」

「さっきお前と初めて会ったときに一緒にいた男だ」

「ああ、あの帽子被ってた小さい男か」

「あいつが今のところ一番厄介な敵になるはずだ」

「わかった。油断しないで行こう」

「勿論だ。付いて来い」

ガスタスに付いて行きながらシキは後ろに背負っている少女を見た。

さっきから反応がないと思ったら寝ていたのである。

しかし腕はちゃんとシキに？ まったままなので落ちる心配はないだろう。

「困ったな……」

ガスタスに気付かれないくらいの声でシキがそつとつぶやいた。
このまま後ろで寝ている少女を放っておいてもいいのだが、敵との戦闘になった場合結構面倒になるかもしれないからだ。

今シキが遠距離攻撃できるものと言えば魔法くらいしかないので、その他の戦いは全て格闘になる。

その場合後ろにいる少女が耐えられるかどうか。

と言ってもそういう場合は後ろで寝ている少女を起こせば問題な

いのだが、シキには選択肢として頭に現れなかった。

「ガスタス」

「なんだ」

「俺の連れが寝てる。すまないが、魔法援護だけでいいだろうか。その、帽子被った奴が来たときはちゃんと起こすからさ」

「……十分だ。と言うよりも雑魚研究員など、俺の力だけで十分だわ!!」

「そうか。なら全部任せる」

「おうよ!」

さっきやられそうになっていたのはどのどいつだ。とシキは心の中で思っていたが言葉には出さないでいた。

雑魚敵を全て戦わずに済むのなら、楽なものである。

ガスタスは人が3人程度並んで歩けるような通路を進んで行っていた。

シキはその後ろをゆつくりと進んでいく。後ろからも敵が来る可能性もあるので、後ろの警戒も忘れないでいた。

ただ進んでいるだけで会話はほとんどないので、シキは先ほどの質問でガスタスが言っていた回復結晶のことを聞いてみることにした。

「さっき言ってた回復結晶ってよ」

「ん? 気になるのか」

「ああ。それと高価な物なのか」

「そりゃあ、おめえどんな傷でも死なない限りはほとんど回復するからな。結構高いぞ。確か3エルと20ルコートくらいだったはずだ」

エルーとルコートというのは、この世界の通貨である。

ルコートというのは1番低いもので、エルーというのは50ルコートで1エルー。そしてエルーの上にはシルエと呼ばれる通貨もある。

ちなみに1シルエは20エルーである。

「まじかよ……それって1個でだよな？」

「ああ。そうだ」

「高いな……」

便利なものだがかなり高価なものだったらしい。

確かにほとんどの傷が治るといふのには惹かれるが、そんなにお金を出して買う程も価値はないな。とシキは思った。

「おっと。敵さんの登場だ。言っておくが、ここからあと少しで研究所から出られるからな」

「そうなのか。じゃ、頑張ってくれ。危なくなったら魔法で援護するから」

「任せろ！」

通路の向こう側から兵士が2人でこちらへ向かって来ていた。相手は銃を持っており、既にこちらへ撃とうと構えていた。

シキは防御魔法を使いながら回避しようとし、ガスタスは真正面から突撃していった。

「おおおおお！！」

ガスタスが兵士の1人の顔を殴り、相手をよろめかせた。1回の攻撃で倒れない所を見ると結構なやり手であるようだ。

ガスタスが兵士を殴った隙を見て、もう1人の兵士がガスタスに

向かって銃を撃つが、それはガスタスの防御魔法で跳ね返されていた。

シキは出来るだけ相手に気付かれないように動かなかった。こちらへ攻撃が飛んで来ると背負っている少女に衝撃が響きそうであったから。という理由を頭の中で考え、本心は戦うのが面倒だから動かなかった。

ガスタスはよろめいていた兵士にもう2撃与えて、相手を倒した。そしてもう1人の腹に強烈な1撃を与えて倒していた。

「そっちは大丈夫か？」

「ああ、1撃も食らってない」

「そうか。お、お前あの光が見えるか？」

「どれだよ」

ガスタスは少し向こう側にある壁を指さしながらシキに聞いた。シキは光っている所など見えなかったので不思議に思った。

「やっぱり俺らみたいな関係者じゃなかったら見えないのか……もうその壁を通れば出口だ」

「？」

シキはその光とやらが見えなかったのでただガスタスの後に付いて行った。

「ここだ」

ガスタスが指さしている壁の前まで来たが、他の壁と違う所がシキにはよくわからなかった。

そうしているとガスタスがその壁を手で殴るような形で押した。すると扉が開きちよつと小さな部屋への入り口になっていた。

「人体実験場は迷路かカラクリ屋敷か？」

「否定は出来ねえな」

2人が部屋に入ると少し先に扉が見えた。

「あれで出れるのか？ 何かあつさりとこれだな」

「だが、ここからは簡単には通さん！！」

「！？」

上から声が聞こえた瞬間に上から小柄な男が降ってきた。帽子を被り自分の身長約2倍くらいの剣を持っている。

「ちっ！ 来やがったか……クエスタ！！」

「さつき会ったばかりだがガスタス！ それにしても、お前らまで出口（こ）に来ているとは、情報にはなかったんだが……」

そついい目の前の帽子男クエスタは剣を縦に構えながらシキの方を見た。

「セシリア、起きろ。また後で背負ってやるから少し床に座つてろ」

「うー……？ わかったー」

セシリアは寝惚けている様子でぼやーとしているが、ちゃんと言われた通りに床に座った。

まだ半分寝ているといった感じだろう。

「さて、こいつを倒さねえと進めないぞ？ 気合い入れろ！！ 小

僧！…！

「言われなくてもそうしてやるよ、ジジイ…！」

5 話（前書き）

また遅くなってごめんなさい

5話

「それで？ 何か作戦とかあるのか？」

「あるわけないだろう？ こいつと会うのなんざ、計算に入ってなかったんだからな」

「おいおい、さつき会いたくねえとか言ってたっけか？」

「知るか。さっさと倒してここから逃げるぞ！」

ガスタスはそう言ってクエストの方へ突撃して行った。

「ログアデーレ
下級魔法術 タイプシオン
分裂魔法 『クインティル
五本の棘』」

シキはガスタスに合わせて分裂魔法をクエストの方へと放った。

「ほう。意外にいい組み合わせのよう……だな！」

「！？」

だな！ と言った瞬間クエストは呪文を唱えることなく同じ分裂魔法を放ってシキの魔法を防ぎ、そしてガスタスと戦闘を始めた。

シキはかなり驚いたが、ガスタスは驚くことがなかった。

——呪文を唱えないで魔法を使うなんてことは前の世界ではあり

えないことだつたはず……！

シキは自身の心の中で戸惑っていた。

この世界には自分の知らないことがたくさんありすぎると。

「シキ。今は無音魔法。サイレントマジック 普段呪文を唱えて発動するよりも威力は

落ちるけど、速さだけを求めるなら1番の技、だよ。あの人、シキの魔法と同じ威力をこの技で放てるってことはかなり強いから気を付けて！」

「あ、ああ……」

後ろにいたセシリアが説明してくれた。どうやらこの世界では常識の範囲内だったらしい。

シキにしてみれば常識はずれもいいところなのだが。

「参ったな……すぐに放たれる魔法の対処法なんて知らねえぞ……」

目の前でガスタスがクエスタの剣をギリギリで躲し、懐に入ろうとするが中々うまくいってなかった。

「インタデメリー 中級魔法術 ディブシオン 分裂魔法 『ウンデカル 十一の剣』！」

シキは隙を見て間からクエスタに向かって魔法を放つが、全て剣で往なされたり、無音魔法とやらで防がれてしまった。

「ん？」

シキはクエスタが使う魔法に違和感を感じた。

シキの魔法を相殺出来る程の威力の無音魔法を使えるというのなら、なぜ今の魔法は中級呪文で相殺したのではなく剣と下級呪文を合わせて躲したのだろうか。

中級魔法を使わなかったことで、ガスタスにはかなり隙を見せてしまったはずだ。

それでも1撃もまだ食らってはいないようなので、クエスタが強いのかガスタスが弱いのかのどっちかであろう。

シキがガスタスの援護をしているとはいえ、このままだったらガスタスはクエスタに負けてしまうだろう。

今2対1の状況でガスタスは押され気味で反撃など出来そうもない。

「仕方ない。使いたくなかったけど、やったみるか。ガスタス!! 下がれえ!!」

「あん!? うおっ! わあっ! さがりやあいんだろ!!」

シキが話かけたその時にクエスタの剣がガスタスを貫きそうになった。危うく躲しながらガスタスは後ろに下がっていった。

「エクストラ最上級魔法術 ストレート直線魔法……」

シキはクエスタのいる範囲だけに魔法をとどめるように集中しながら呪文を唱える。

「『キサグラム六芒星』!!」

呪文はラドンと言っていた男と戦っていた時よりも小さく、そして鋭くなってクエスタの方へと向かっていく。

「むん!!」

クエスタが気合いと共に剣で最上級呪文を防ごうとしていた。い

くらなんでも不可能であろうとシキは予測していた。
剣と魔法がぶつかった瞬間に爆発が起こりクエスタの姿は見えなくなった。

「……やったか？」

シキが隣まで来ていたガスタスに訊いた。

「わからねえ。だが、奴を甘く見ない方がいいな。それにしても、お前まさか最上級魔法使いだったとはな」
エクストラ

「まあな。今じゃ雑魚最上級魔法使いですけど」
エクストラ

「なんだそれ、皮肉か？」

「いんや」

実際この世界に来てからそうなのであると、シキは思っていた。
この世界にいる最上級魔法使いエクストラならば、自分よりも数倍強い奴らがいるのであろうとシキは予想していた。

「それにしても中々現れな……」

「！！」

ガスタスが話していた途中に胸を何かで貫かれていた。
シキがその何かを、理解するのに数秒かかってしまい、すぐ近くまでクエスタが近付いていたことに反応できなかった。

「ふん！」

「っ！」

近付いていたクエスタはシキを蹴り飛ばすとガスタスに突き刺していた剣を抜いた。

「んがぁ……てめえ、ほとんどダメージ当たってねえのかよ……」
「あの程度の最上級魔法^{エクストラ}では死ぬほどの傷は受けない。少しは食らったがな」

——この世界の奴らは化け物ばかりだな。と心の中で思いつつシキは苦笑した。

最上級魔法^{エクストラ}を生身で食らっても生きている奴なんて前の世界ではありえなかったことだ。

シキの魔法が少し弱くなった。という所為もあるかもしれないが。

「シキ。貴方は剣使えるの？」

「ああ？ まあな。そこらの奴らよりは使えるはずだが……」

少し遠くの方からセシリアの声が聞こえてきた。

「なら、私を信じてくれる？」

「またそれか？ いいぜ、信じてやるよ。何を信じるかは知らんけど」

「！ シキ！ 行つて！！」

「お、おう」

セシリアが急いだように言った意味がよくわからなかったが、クエスタとガスタスの方を見た瞬間に理解し、そっちへ向かって全速で掛けて行く。

ガスタスがクエスタにトドメを刺されそうになっていたのだ。抵抗しているとはいえ、胸を貫かれているガスタスが最初戦っていた時よりも動きが悪くなっていた。

「シキ。貴方は剣を持っている！ 光よ、彼に力を」

後ろから聞こえてきたセシリアの声の意味がわかりずらいな。と思いつながらシキは頭の中で自分が剣を持っていると信じる。

ただ単に剣を持っていると信じてと言ってくれば何も迷わずにそのことを考えられるのだが、言いきられてしまうと、今まさに剣を持っていると錯覚してしまいそうだった。

剣は自分の手に現れていなかったが、きっと精霊魔法使いのセシリアが言うのだから何か魔法を発動させてくれるのだろう。と信じてシキはクエストに斬りかかった。

シキの手はまだ何も掴んでいなかったが、剣を持っている感じで相手の剣に当てる感じでぶつかっていった。これで何も起こらなかったらシキはただ隙を見せただけである。

なぜこんなにも彼女を信じれるのか。シキ自身もわかっていなかったが、考えることは一旦預けることにした。

「む!？」

ガキーン! と音がしてクエストの剣が何かとぶつかり合った音がした。

「貴様……! まさか……!」

クエストがかなり驚いている。実際シキの方が驚いているのだが。シキは光で出来たような剣を持っていた。実際に剣自体が光っているのでもしかしたら光で本当にできているのかもしれない。

剣と光で出来た剣で鏢迫り合いをしていると、クエストの方から距離を置いた。

「……これは、思ったより厄介じゃないか」
「大丈夫か？」

クエスタの言葉を無視してガスタスの方へと声をかける。

「なんとかな……だが、もう戦闘じゃ足手まといになりそうだ」
「そうか。なら下がって居ろ。ここからは俺がやる」

シキはそう言ったあとクエスタの方へと突っ込んで行った。もう魔法は使わないことにしたのである。

「はっ！」

クエスタは無言で魔法を放ってきた。

魔法の数が5つだったので、下級の分裂魔法だと判断した。

3つの魔法を掠るくらいのギリギリのところで躲し、他の2つは剣で叩き落した。

「なんだ……この感覚……昔どこかで……」

シキはなんとなく呟きながら、クエスタと剣をぶつかりあった。
キン！ という音が部屋に響く。

クエスタの動きは見た目通り素早く懐に迫る隙がなかった。しかも少しずつ後ろに下がりながら戦ってくるので、追い詰めるのが難しい。

一方シキは攻めているが、クエスタにダメージを与えられず、逆に少しずつ傷を受け始めていた。

だがシキは傷を受ける度に自分の神経が段々と研ぎ澄まされていく感じがしていた。

そして、クエスタの攻撃の速さが遅く感じるようになって来ていた。

「終わりだあ！！」

クエストがそう言いながらシキの方へと迫ってくる。

この行動は初めてなのでシキは一瞬動きを止めた。

そしてクエストはシキのちよつと手前辺りで、自分の体を横に回転させながらこちらへと向かってきた。

しかもその回転速度は恐ろしい程速かった。クエストの射程範囲に入ったらすぐさま細切れにされてしまいそうだった。

「シキイ！！ 下がれ！！」

ガスタスが叫んだがシキは無視した。

なぜか自分ならばあの回転斬りを捌くことが出来る気がしたからだ。

シキは目の前で回転している男が具合を悪くすることはないのだろうか。と本当にどうでもいいことを思いながら回転している剣に軽く自分の剣をぶつける。

剣が手から離れそうになったがなんとか持ちこたえた。クエストの剣の勢いは消え去り一瞬その場に剣が停止していた。

これで回転は止まった。が、今度は逆回転しはじめた。しかし今度はゆっくりと回転していた。

どうしてそんなにゆっくりなのかはわからなかったが、大きい隙が出来ていたのでシキは迷わずクエストの方へと向かった。

「せいやあ！！」

「！！」

シキが近付いて行くとクエストが剣の動きをいきなり変えて、ま

た逆方向に急に回転させ始めた。

シキは近付いてくる剣とは逆の手に剣を持っていた。

もしシキが逆の手に剣を持っていたならば、簡単に彼の攻撃を凌ぐことが出来たであろう。

「小僧！」

ガスタスが声を上げる。だが、シキの姿はどこにもなかった。

「え？」

ガスタスが呆けたように言った。

シキが細切れになったのかもしれないとも思ったが、クエスタの周りに血が飛び散っていたりしなかったので、それはないと確信した。

それに、ガスタスはクエスタよりもちょっと奥の方にいるシキの姿を確認したので安心した。

逆にクエスタはかなり辛そうな表情をしていた。

「ぐ、あああああああー!!」

「!？」

シキは自分があのにきにどうやってここまで来たか覚えていなかった。

ほとんど無意識と言ってもいいのだが、若干移動する前にやったことは覚えていた。

クエスタの右腕を斬り落としたのである。

が、シキにとってはそんなことはどうでもよかった。今自分に起

きている異変の方が重要だった。

「き、貴様ああ!!」

後ろの方でクエストが悶えている声が聞こえたが、シキは無視した。

自分の何かがおかしくなっているものを探っていた。
体が勝手に動こうとし、全てを壊したくなる衝動が襲ってくる。

「嘘だろ……これって昔の衝動じゃ……!!」

シキは後ろからクエストが襲いかかって来る可能性もあったが、シキは自分の体を抑えるのに集中し始めた。

「まさか、オーバーマジック魔力解放を使った？」

セシリアは誰にも聞こえないような声でぼそりつぶやいた。

「シキ。貴方は何者なの……。にしても、暴走している？ 止めなきゃ」

セシリアはシキが何かおかしいことに気が付いて傍に寄って行った。

「シキ。大丈夫？」

「っ！ セシ……リア。は、離れてろ」

「安心して。もう終わったよ」

そう言いながらセシリアはシキに抱き着いた。

「!？」

シキの体はセシリアが抱き着いている場所から力が抜けて行き、その場に倒れ込んでしまった。

「これも……精霊魔法なのか？」

「違うよ。私は何もしてないよ」

シキは体に力が入らなくなって床に倒れたままだった。だが、悪い気はしなかった。

それと、この感覚は昔にも味わったことがある気もしていた。

「なあ。セシリア」

「？」

「お前の名前って本当にセシリアなのか？」

「そっだよ？」

「……そうか。悪い」

「？」

セシリアはシキの顔を不思議そうに見つめていた。

「そっいえば敵は？」

「大丈夫。彼が倒した。安心していて」

「ああ……」

セシリアはシキの頭を持ち上げて自分の太ももに乗せた。
要するに膝枕である。

シキがセシリアの方を見ると、彼女はニコニコと笑っていた。その顔を見るとなぜだかシキは安心してセシリアに体を預けていた。

数分してシキは体に力が入るようになったので、ガスタスの様子を見に行くことにした。

本当ならばガスタスの方が相当な重傷だったのだが、シキは自分の体のことばかり考えていて彼が怪我をしているということを忘れていた。

今まで体に力が入らなくて、そちらへ行けなかったと理由付けして忘れていたことを隠そうと思いながらシキはガスタスの方へと向かった。後ろからセシリアも付いて来ている。

「ガスタス。無事か？」

ガスタスは床に胡坐をかきながらくつろいでいた。

「ああ、こいつが持ってた回復結晶を拝借したからな」

ガスタスは薄い色の結晶をシキ達に見せながら言った。

「普通に盗んだって言えよ」

「まあ！ その扉を出ればこの国ともおさらば出来るんだ！ 関係ねえよ！」

「あつそうかい。……とセシリアはもう歩けるな？」

「うん。歩く」

「よし」

シキはそのまま外へと続く扉へ向かおうとしたが、ふと立ち止まりクエスタの方を見る。

「こいつ死んだのか？」

「いや、お前らが何かやってる間に俺が後ろから殴っただけだから死んではいないはずだ」

「よくあの状態でお前動けたな」

「体だけは丈夫なんでね！」

「ほう……なら今度俺の最上級魔法でも食らってみるか？」

「死ぬわ！！」

「えー」

軽口をたたきながらシキ達は扉を開けてその場所から出て行った……。

6話 目的地（前書き）

遅い更新なのに、段々とお気に入りが増えてきています。
本当にありがとうございます

6話 目的地

出口から出たシキは隣を歩いていったセシリアの手を引き、ガスタスから距離を取った。

「何のつもりだ？」

シキの行動を不信に思い、ガスタスがシキに問いかけた。

「俺たちの協定はこの研究所から脱出するまで。出た瞬間に攻撃されることも想定していただけさ」

「ああ……そうだったな」

ガスタスは溜息をつきながら言った。

「お前には敵わなさそうだな」

「そうでもないさ」

シキは周りを見渡してみた。

周りは木々が生い茂り、簡単に言えば荒れていた。

整備された道など見当たらなかったが、木と木の間は人が通れる
くらいのスペースはあったので、進むには問題ないだろう。

「……こんなに荒れた場所に研究所の出口はあったのか？」

「んなわけねえだろ。ここは裏口。本当の出口じゃない」

「……騙したのか？」

「それなら正面から行けってんのか！？ 今倒してきたクエストよりも強い奴らがいるんだぞ！」

「……そうかい、お前は戦闘部隊の副隊長じゃなかったのかよ」

「研究所ではな。外の奴らとは力の差が違う」

「へー」

シキはここが正面の出口だと思っていたので、まずは自分の国に戻ると思っていたのだが予想が外れてしまった。

思い返してみると、確かに警備が手薄だったりしたな……などと
今更気が付いた。

「というより、セシリア。お前も最初からその気だったのか？」

「私も裏口から出ようかと思ってた」

「……」

正面から出ようとしていたシキはその場に蹲った。——正面
から出ようとしていた自分が馬鹿だったと。

「それで？ てめえはどうするんだ？」

ガスタスは沈んでいるシキに話しかけた。それでも起きる気配

はない。

「……………何も考えておりませんよ」

「おいおい」

「じゃあてめえは何か考えてんのかよ!!」

「ああ。俺はこれから騎士国ワードメイドに行こうと思っている」

「はいはい。さっさと行けばいいじゃねえか」

シキはどこへ行こうかと悩んでいた。

今一番近くにある国は聖都アクナシア。その次に騎士国ワードメイド。そして魔法都市ウォーラル。魔法都市はシキをこの世界へと飛ばした精霊魔法師がいるはずだ。

シキは体を起こしその場に座った。

後ろから敵が追いかけて来る可能性もあったが、放っておいた。来たら来たで、倒せばいいと思っていたからである。

「あのよ」

「ん？」

「一緒に行かねえか？ 騎士国ワードメイドまで」

「……」

悪い提案ではなかった。

シキは今聖都の場所以外は知らなかったし、この男が場所を知っているのなら聖都に行くよりも、そちらへ行っただ方が安全といえは安全である。

「場所は知っているのか？」

「ああ。勿論だ。だがここから歩いてなら2週間はかかるな」

「遠いなあ」

そう思いつつシキは横にいて手を繋いでいるセシリアの方を見た。
シキが騎士国に行くのはいいが、セシリアはどう思っているのか
を聞く為である。

「セシリアは、どうなんだ？」

「……連れてって欲しい。そこが私の国だから」

「え」

「は？」

シキとガスタスは互に見つめあい、数秒の間停止した。
そしてお互いに近付いて――

「速攻で向かおう。1週間で着くくらいの勢いで」

「奇遇だな。俺もそれくらいの速さが丁度いいと思ってたんだ」

お互い握手した。これで騎士国ワードメイドまで協定が更新され
た。

しかし……とシキは思う。

確か昔の世界の自分は1日もかからないで国々を移動していたよ
うな気がして、あの頃の自分は――と言ってもついさっきなの
だが、本当に怪物だったなあ。などと呑気に思っていた。

「問題はこの山道をどうやって進んで行くかだ」

「俺の最上級魔法で破壊していくか？^{エクストラ} とはいえ方向がわかってい
ればの話だが」

「方向はわかっている。この裏口の向こうが北でその左が西だから
右に行けばいい。だが最上級魔法^{エクストラ}じゃあ駄目だ。派手すぎて敵に気
付かれる可能性が高くなる」

「……そうか。じゃあとりあえず、右にいけばいいんだよね？」

シキは研究所の裏口を背にしながら言った。

「待て待て。そっちから見ての右じゃない。裏口の方を見た時の右だ。そっちじゃ西だ」

「そ、そうか。セシリア、すぐに帰らせてやるからな」

「私の力なら、3日で行ける」

「え」

「な、なに？」

シキとガスタスはセシリアの方へ体を向け、話を聞く体制になった。

「私の精霊魔法を使えば、少人数ならワープさせることが出来る。

でも1日に1回。次使えるようになるまで1日かかるから、少し時間がかかる」

「何言ってるんだよ。歩いたら2週間なんだろう？ 速いってもんじゃねえだろそれ。お前本当にすごいよ」

「えへへ。ありがと」

セシリアは恥ずかしそうに笑顔を見せた。

シキとガスタスは尊敬の眼差しで彼女を見ている。

「じゃあ早速行こう。シキ。ガスタスの手を掴んで」

シキがガスタスの手を握り、セシリアの方を見ると目を瞑っていた。

「2人共、目を瞑って」

「おう」

「了解」

シキとガスタスが目を瞑った瞬間に、体がぐらりと揺れた。そして何かに引きずり込まれる感覚に襲われるたが、目は開けなかった。

「もういいよ」

シキが目を開ける前にガスタスの手を離した。そして目を開けると、周りがさっきまでいた場所とは変わっていた。辺りを見回すと木々で荒れているのは変わりないが、後方に研究所の裏口はなかった。

「こりゃあ、すげえけどよ。方向がわからんなあ」

ガスタスがぼそりと呟いた。確かにこれだけ周りが木しかない場所で、方向などわかりもしない。

たった今瞬間移動してきたというのだから、尚更である。

「大丈夫……夫。あっち。シキ……疲れたから、背負って……」
「はいよ。あっちだな」

シキはセシリアを背負いながら彼女が指を刺した方向を見た。それにしても、精霊魔法使いは方向までわかるのだろうか。とシキは疑問に思ったが、セシリアがもう寝始めていたので後で聞くことにした。

「だとよ。ガスタス。ここから進むよな？」

「勿論だ。それにしても、このお嬢さんは凄い力を持っているな。普通の精霊魔法使いよりもかなり力がありそうだ」

「普通の精霊魔法使いを見たことがあるのか？」

「ああ。結構あの研究所に連れて来られたのを見たことがある」

「……お前さ、そういうの見てて悪い気とかしなかったのか？」
「……したさ。でも、そうしなきゃ俺が殺される。仕方なかったんだ」

「そうかよ」

シキはこれ以上会話を続けると雰囲気が悪くなりそうな気がして会話をやめた。

そこから2人は会話をせずにただ歩き始めた。

聞こえる音といえば、地面を踏む音や、偶に聞こえるセシリアの寝息だけである。

しばらく黙ったまま進んで行っていると、ガスタスがシキに話しかけた。

「なあ」

「なんだ」

「さつきから歩いてるけど、魔物に会わねえな」

「そりやそうだろ。こんな国と国を行き来するだけで続々と出てこられたらこっちだって、あっちだって困るだろ？」

「そりやそうだが……」

「出たとしても、LEVEL3や4くらいの奴しか来ないだろうから安心しとけ」

「そうなのか？」

「多分」

この森にはよく魔物が出るので、魔物の森と呼ばれている。

町にも魔物は存在しているが、町には危険のある魔物はほとんどいない。

魔物にはたくさんの種類がいるが、それぞれの危険度でLEVEL

L分けされている。

世の中で知られている魔物のLEVELは7までである。

LEVEL1はほとんど実害はない。空間にふよふよと浮かんでいたり、木の葉に交じっていたりと、意外に見つけにくい奴らのことを分ける。

LEVEL2もほとんど実害はない。ちょっかいを出さない限り危険はない奴らである。子供が偶にちょっかいを出して指をかじられたりするが、少し痛いくらいですむ。

このLEVEL1、2は日常的にもよく見かけることがある。世間では邪魔物と呼ばれていたりするが、人間にほとんど被害は出さないのも、あまり危険ではない。

この1、2LEVELの魔物が普段町の中でも自然に見かけるものである。

そして、普段見かけることがないのがLEVEL3、4である。

LEVEL3、4は獰猛で人間を見つけると必ずと言っていいほど襲いかかってくる。

なので各国々は城壁などを作って魔物の侵入を防いでいる。

LEVEL5の魔物は知能がある。

しかし、LEVEL5の魔物の心は穏やかで、人間と共存していることが多い。

聖都ではありえないことだが、他の騎士国や魔法都市ではよく見る光景だ。

厄介なのはLEVEL6。

知能があり、凶暴で、絶対に怒らさせてはいけない存在でもある。なぜなら1体で町を滅ぼすこともあるし、国単位で戦いを挑んでも勝てるかどうかかわからないという程力を持っているからである。

最後にLEVEL7。

伝説とされ、最強の魔物。

この世界に7体しかいないと言われている伝説の存在。

その者達に力を認められし者は、最強の武器を授けられるという伝説があるが確認した人が誰もいないので、実際はいるかどうかもわからない。

「LEVEL6なんて出て来られたら最悪だけだな」

「それは言ってるな。逃げるしかないな」

「逃げれるかどうかもわからんけどな」

そんなことを言いながらシキとガスタスは歩き続けた。

「お、おい。そろそろ休まねえか？」

「……だな」

空を見上げると真っ暗になっており、辺りもほとんど見えなくなっていた。

シキはただ単に真っ直ぐ進んで行っただけなので、暗くてもほとんど問題はなかった。……偶に木にぶつかることもあったが。

ログアデーレ ストレート
「下級魔法 直線魔法 『貫く槍』」

シキは近くの木の上にある枝に当てようとして、魔法放った。見えていないので、方向は適当だった。

魔法を放つと、何かを掠る音とぱらぱらと何かが落ちるような音

が聞こえた。

「火、持ってるか？」

「ああ」

シキが尋ねるとガスタスは自分の懷から薄く紅く光っている結晶を取り出して、指で衝撃を与えた。

そうすると結晶の光が段々と強くなっていく。ガスタスは近くの地面に放り投げて、シキが魔法で上から取った枝を結晶の近くに持っていく。

「最初からそれやってもらえばよかったか？」

「これは1分しか持たないから、最初に枝が何かを集めていた方がいいんだ」

「へえ。それにしても、本当にお前は便利だよ」

「何言ってるんだ。これくらい普通に手に入るだろう？」

「そうだったけ？」

「大丈夫か？ お前」

シキは数十年の年月戦うことしかやっていなくて、そういった常識を少し忘れてしまっていた。なので、戦闘に関する物以外の知識はほとんど忘れたと言ってもよかった。

「これは燃焼結晶。一般の奴らも結構使っているから知られてないはずはないんだがなあ」

「……そうか」

「その様子じゃ、どういう効果かも知らないみたいだな。まあ見てな」

ガスタスに言われ、シキは燃焼結晶の方を見た。

シキが見たのを確認するとガスタスは結晶の周りに置いた枝を掴み、結晶に枝で触れた。

結晶に触れた枝はそこから火がつき、燃え始めた。

「こんな感じで、この結晶には火の力が宿ってるんだよ」
「へー」

ガスタスは火をつけた枝を他の枝にも付くように近くに置いた。

シキはふと背負ったままのセシリアの方を見た。
彼女はまだ眠ったままだである。

この様子ではまだまだ起きる気配はない。あの精霊魔法はそうとう負担が掛かるらしい。

「ガスタス。俺が見張っているから、お前は休め」
「何言ってるんだ。俺よりもてめえのが子供^{ガキ}なんだからお前から休め」
「いや。お前は回復したとはいえ、戦闘でダメージを負っているだろ？ 先に休んだ方がいい」
「……わかった。けど疲れたらいつでもいいから起こせよ」
「了解」

そう言っただガスタスは座りながら木に寄りかかると、すぐにいびきが聞こえてきた。きつと疲れていたんだらうとシキは苦笑しながら、背負っているセシリアを起こさないようにゆっくりと下ろした。と言っでもちゃんと手で抱えたままなのだが。

そして自分も木に寄りかかりながら座り、セシリアをどうしようかと悩む。

「……………シキ？」
「んん？ ああ、起こしちゃったか」

「……もう夜だ……」

セシリアが目を擦りながら言った。

セシリアはシキの手に抱えられたまままで居たので、無防備に寝惚けたままの顔をシキに見られていた。

「お前、もう少し寝てた方がいいんじゃないか？」

「んー………そうする……」

セシリアはシキに降ろしてと手で示した。

シキの手から降りたセシリアは地面に座っているシキの上に座り、寄りかかって来た。

「おい」

「んー……。あつたかい……」

ふにゆう……という声を出しながら、セシリアは再び夢の中へと旅立った。

「どうすんのこれ」

このまま魔物や敵が襲って来たらかなり対応に問題がある気がしたが、シキはどうすることも出来なかった。

彼女は確かに軽いし、（膝の上に）乗せていてもほとんど問題はないのだが、やはり敵襲のことを考えると不安になってくる。

——まあ、なんとかなるか。などと自分でも信じられないようなことを思いながら、シキはセシリアを軽く抱きしめていた。

7話 ゴーレムのちに騎士（前書き）

前回お気に入りが増えたって言ったら一気に減った。
どういうことなの……？

7話 ゴーレムのちに騎士

段々暗かった森が明るくなっていき、夜が明けた。

……結局朝になるまでずっと見張りをしていたな……などと思いながらシキは辺りを見回す。

夜の間ずっと見張りをしていたが、魔物が来ることはなかったし、ましてや人間なんてこなかった。

「……もうそろそろ朝……っーか朝だな」

途中でガスタスに交代してもらおうと思っていたが、シキは面倒になって放っておいた。

シキは今自分の体が普通の人間の状態だということを忘れていた。前の世界の時には睡眠という行為は必要なかった……というよりも、その行為自体が出来なかったのでシキは睡眠の仕方というのがよくわからなかった。

「……んあ？」

「起きたのか」

「ああ………そろそろ交代しようか………？」

「寝惚けているならまだいい。それにまだ朝早い。寝ている」

「ああ……わか………って朝あ！！？」

「……うるさいぞ。セシリアが起きたらどうするんだよ」

セシリアはまだシキの膝枕ですうすうと正しい寝息をたてながら寝ていた。

「で、でもだ！ お前寝てないんだろ！？ 体力持たないぞ！」

「……そうなのか？」

「そ、そうなのか？ ってなんだよ！ それくらいわかるだろ！」

「……いや。寝れる気がなくてだな」

「……眠くは………ないのか？」

「まあな。問題ない」

「……今日は絶対休めよ」

「わかった」

シキはとりあえず返事をした。

寝ようと思っても寝れるかどうかわからなかったからだ。

ガスタスはもう寝る気はないようで、木に寄りかかったまま黙っていた。

シキも特に話しかけることもないので黙っていた。

「ん………もう朝？」

「ああ。朝だ」

セシリアが太陽が頭上の真上に上がったくらいになってから起きた。

「ワープってどれだけ疲れるんだ？ そんなに疲れるなら、今日は普通に歩いた方がいいんじゃないか？」

「大丈夫」

「……そうか」

「それより、シキの方が心配」

「なんでだよ」

「なんとなく」

「大丈夫だから安心しろ」

「わかった」

ガスタスに出発できると言い、こちらへと来てもらった。

「また目を瞑ればいいんだろ？」

「うん。そうして」

シキは嫌々ガスタスの手を握り目を瞑った。

そうすると体が何かに引きずり込まれる感じがした。

この感覚には一生馴れそうにないな。

とシキは思いつつも黙っていた。

「もういいよ」

セシリアの声を聴いて、やはりシキは目を開ける前にガスタスから手を離れた。

「今日も背中に乗るか？」

「今日は大丈夫。歩ける」

そう言ってセシリアはシキの手を掴んだまま歩きだした。

「こっち」

「あいよ」

ガスタスはシキとセシリアの後ろからゆつくりとついて来ていた。ワープした場所は、相変わらず方向がわからなかったのでセシリアの案内に頼るしかなかった。

シキは周りから何か襲ってこないか警戒していたが、何も感じる事がなかった。

……ただ歩いていると暇だな。

昔は3国の移動に2時間も掛からなかったはずなので、今思うとかなり便利な気がしてきた。

しばらくの間、無言でずっと進んでいた。

辺りが木々で埋め尽くされているので、方向を間違えそうにもなるが、セシリア迷わないでどんどん進んで行くのでシキとガスタスはただそれに従っていた。

そして、太陽が沈みかけた時に……

「あれ？」

シキは足に力が入らなくなりその場に膝をついてしまった。

「大丈夫？」

「ああ、わ、悪い。と……あれ？」

シキが足に力を入れて立とうとしても全然立てなかったどころか、逆に地面にうつ伏せに倒れそうになった。

それをセシリアが支えてくれた。

「今日はここで、休もう。ガスタス。いい？」

「……………も、もちろんだ。てめえらどんだけ体力続くんだよ……………」

「昨日も今日も飯食ってねえのに何でそんなに元気なんだよ……………」

……

「そつえばご飯食べてなかったね」

セシリアはシキを横に倒し、膝枕の体制に持っていた。

「え？」

「今日は休んでいいよ。お休み」

セシリアがお休み。と言った瞬間にシキの意識は段々朦朧となつていき、シキが精霊魔法でも使ったのか？ と疑問を抱いた瞬間にはもうシキは眠っていた。

「よし。寝た」

「お嬢ちゃんやっぱり普通の精霊魔法使いじゃねえだろ？」

「ん？ どうして？」

「俺が知ってるなかじゃあ、そんな力を持った奴なんて見たことねえぞ」

「？ 今のはシキが勝手に寝ただけで、私は何もしてないよ？」

「……………そ、そうか。勘違いだ。すまねえ」

「別にいい。ところで何か食べ物とか持っていないの？」

「あつたらさつさと食ってるよ。全く、魔物の1匹くらい出てきて欲しいもんだ」

「はぁ…… “光よ、我らに癒しを”」

セシリアが溜息をつきながら呪文を唱えると、3人を光が包み込み――

「お、……お！？ 何か腹が満たされていく感じが……！」

ガスタスが1人騒いでいるのをセシリアは無視していた。セシリアは一応シキと自分にもかけたが、実は歩いているときに常にかけていたのは秘密である。

ちなみにこの魔法は満たされた感じがするだけで、実際は満たされてはいない。これをしばらく続けていると大変なことになるが、3日くらいは持つであろう。

「ん……」

「あ、起きたー」

「え？ ……寝てたのか」

「全く、昨日無理するからこんなことになるんだよ」

「ガスタス。貴方が途中で起きなかった所為でもあるんだよ？」

「うぐ……否定できぬ」

シキが目を覚まして1番最初に見たのはセシリアだった。
体を起こして辺りを見回すと夜になっていたらしい。昨日と同じ
様に結晶を使っただのか、焚火をしている。

「……俺はなんでこんなに寝て……？」

「疲れてたんだよ。もう少し休む？」

「いや、大丈夫」

「そう。あと5分くらいしたらまた、瞬間移動出来るようになるか
ら待ってね。そうしたら私の国に着くはずだよ」

「そいつはよかつ！？」

シキは何かの気配を感じて辺りをよく見回した。

「どうしたの？」

「何かが……来る！」

数秒経った頃、ドスンという音がシキ達の耳に届いた。
セシリアはびくつとしてシキの近くに寄ってきて、ガスタスは音
のした方を見ながら警戒しはじめた。

「おいおい、まさかこんな所で魔物か？」

「……」

再びドスンという音が響いた。今度はさらに近付いてきているよ
うで、音がでかくなっていた。

ドスンドスンと音が響く感覚が段々短くなっていき、辺りが揺れ
始めた。

「……！」

「ま、まさか……」

揺れが激しくなり、立っというとは危なくなったガスタスが小さい声で言った。隣にいるセシリアはシキの手を強く握っている。

木々がなぎ倒されるような音が聞こえて来て、ソレは姿を現した。

「あ……う、嘘……だろ？」

そこには魔物ランクLEVEL6の、金剛のゴーレムが立っていた。

姿は暗いのでよく見えないが、体は薄く青い色の結晶のような物で出来ており、どんな攻撃を当てても決して崩れることのない体。体長が7メートルは超える巨大な体。そして目は黄色い色をしており、どんなに暗い場所へ逃げようが全てを見通すことが出来る。と噂されている。

「コオアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

ゴーレムが威嚇した瞬間に地響きが起こった。それは夜という所為もあるのかもしれないが、かなり遠くまで響いただろう。

「くっ！」

ガスタスは咄嗟に逃げようとしたが、足がうまく動かなかった。先ほどの威嚇（咆哮と言った方が正しいかもしれない）の所為で恐怖で足が竦んでしまったらしい。

——と、その時後ろから突き飛ばされて体が動くようになった。

「て、てめえ何すんだ！」

「すまないが、セシリアを連れて逃げてくれ。あと3分も経てば移動できるだろ？ 時間は俺が稼ぐ」

シキがガスタスの前に立ってゴーレムを見上げた。シキはゴーレムの威嚇を食らっても平気だったらしい。

「て、てめえはどうすんだ！」

「それを聞くのは、野暮ってもんじゃねえか？ いいからさっさと行け。すぐに追いつくさ」

「で、でも「いいからさっさと行け！」 お前の所為でセシリアを死なせたらぶっ殺すぞ！」 ちっ！ わあっ たよ！ てめえ死ぬなよ？」

「勿論」

シキがそういうとガスタスはセシリアを連れてどこかへと走って行った。

シキは悠長に構えながら、ゴーレムを見上げる。

「にしても、お前でけえな。確かLEVEL6ってのは知能があつたんじゃねえのか？」

「ゴア？」

「どうやら話は通じないらしい。黙って見過ごしてくれたり、しないかねえ？」

「アアアアアア！」

「そつもいかねえよな！」

ゴーレムは腕を振りかぶりシキ目がけて殴りかかる。それに当たれば即死は間違いないだろう。

シキは横にずれながら呪文を唱える。最初から敵が強いとわかっているならば、手加減は無用である。

「エクストラ最上級魔法術 ストレート直線魔法 『キサグラム六芒星』！」

シキはゴーレムの顔面を狙って呪文を放った。
隣でゴーレムの拳が地面に突き刺さり地面を揺らした。シキはバランスを崩しそうになるが、呪文はゴーレムの顔面に直撃した。
シキが少しは効いたか？　と知っているパラパラと何かが崩れるような音はただで、全く効果がないように見えた。

「これは酷い」

主に硬さ的な意味で。

ゴーレムは呪文が当たったことにも気付いていないようで、さつきと変わらずシキに殴りかかって来ている。幸いなのが、知能が弱いのか、1パターンの攻撃しかしてこないことだろうか。

それに、シキの役割は足止めであって、ゴーレムを倒すことではない。なので相手の攻撃パターンが同じならばいくらでも時間は稼げるはずだ。

シキが再び来た拳を避けるとゴーレムに変化があった。

自分の拳を戻して、時間が停止したように止まったのである。

「……？」

もしやチャンスなのか？　とも思ったが今攻撃したら何か酷い事が起きる予感がしてシキは黙っていた。

「オオオオオオオオオオオオ！！」

掛け声と共にゴーレムの体の薄青く光っているはずの体が細かい破片となって辺りに飛び散った。

「んな！？」

咄嗟にシキは上級クラスの防御魔法を使ったが、そんなものは簡単に打ち破られ、破片がシキにも当たりかなりの距離を吹き飛ばされた。

「うがぁ……！」

木に打ち付けられて、ようやく飛んでいた体が止まった。

破片はシキの丁度胸辺りに当たったようで、かなり痛かった。防御魔法を使っていなかったら死んでいたかもしれない。

「つつても……あいつまだ掛かってくるのか？」

体を起こし吹き飛んで来た方を見るとゴーレムはこちらを見ているように見えた。

ゴーレムの周りは酷い有様だった。

木々はほとんどなぎ倒され、地面は掘り返されたように荒れている。

夜の空に浮かんでいる月の光を浴びて、その姿を現しているゴーレムは悪魔のようにも見えた。

「逃げれそうにないな……」

エクストラ

ここはいつその事最上級魔法の魔法を連発して抵抗でもしてみようか。などという考えが思い浮かんだ。

「シキー！」

「は？」

自分の名前を呼ばれた方を見るとセシリアがガスタスの手を掴み

ながらシキの方へと走って来ていた。

あと数歩で届きそうな距離。

「っ！」

セシリアの方へ向かおうとした瞬間にシキはゴーレムが何かをやろうとしているのが、なぜかわかった。その攻撃は絶対防げない最凶の攻撃だ、とシキの勘が告げていた。

ゴーレムが何かをした。その瞬間にシキとセシリアの手が触れた。そして目を瞑る暇もなく体がどこかへと引きずり込まれる感覚がして――

「――！」

――どこか、遠い場所へと移動したらしい。

体が地面へと投げ出されはしたが、ゴーレムの気配もしないし、周りの森の木々がなぎ倒されている後もない。

「助かった……のか？」

「危なかったよ……。ってシキ！！ もう2度こんなことはしないで！」

「え？ いや、そうするしか方法がなかっただろ？」

シキがなんとなく呟くと、隣に倒れているのかセシリアが怒ったような口調で言った。

「ふーん」

「えー」

「まあまあ、とりあえず助かったんだからいいじゃねえか」

ガスタスが2人の間に入ろうとしながら言った。

「ガスタス！ 貴方もシキを止めてよ！」

「えー俺の所為でもあるのか？」

「ふんだ」

「「えー」」

シキとガスタスの声がシンクロした。

「で、でももう近くなんだろ？」

「あと数分歩けばつくよ」

セシリアはそう言って歩きだしたが、シキはその場で停止した。
また、何かを感じたのだ。……これは、魔力？

「ガスタス！！」

「ん？」

どうやらガスタスは気付いていないらしい。シキは力を感じた方を見ながら戦闘態勢に入った。

セシリアをどうしようかと、思っていると姿がどこにも見えなかった。

シキ達が自分に付いて来ていると思って1人で先に行ってしまったのだらうか？

とりあえず、今は気にしている暇がない。速攻で近付く者を倒して追いつかなければ……！

インタデメリー デイブシオン ウンデカル
「中級魔法術 分裂魔法 『十一の剣』！」

シキは力を感じた方へと向かって魔法を放つ。そうするとカキン！という音が聞こえた。どうやら魔法を何かで弾いたらしい。

「ガスタス。多分相手は2匹だ。お前は右をやれ」
「おうよ。任せろ！」

そう言った瞬間その2匹は姿を現した。しかし、それは人だった。

「な！？」
「ちょー！！」

というシキとガスタスの驚愕する声を無視して……

「こいつらが、侵入者か」
「かなり弱そうだと思うが、そっちの大男は強そうだ。お前がやってくれ」
「わかった」

と言いながら2人の男はシキとガスタスに襲いかかってきた。

1人は剣で、1人は拳で。

2人の姿は堅そうな鎧に身を包み後ろにマントまでつけている。

まるでこの国の重要な戦闘部隊の隊長みたいだった。

幸いなことにシキの方には剣を持っていない方の男がやってきた。

ガスタスは剣の相手と戦っている。

「奴は私より強いのでな。あっちの大男を相手させてもらう。勿論私も強いがな」

そついうと彼はいきなり消えた。そしてシキの目の前には拳があ

り……。

「は？」

シキと男の距離は少なくとも10メートルはあった。だからこんなにも早く近付いてくるだなんて思っていなかったシキはその拳を思いっきり食らい、地面に叩き付けられた。

「うごはあ！！」

「むむつ。結構やるようですね。それでもこの状態の全力で殴ったのですが、耐えるとは思っていませんでした」
「……！」

油断していたというならば、シキの方だろう。相手の実力を測り損ねていた。

シキは顔面に攻撃を食らっていて、鼻血が少し垂れていたが、手で拭うとほとんど止まった感じがした。

「許してください。弱いと思って全力を出していませんでした。が、ここからは本気でいきます。魔力解放」
オーバーマシック

男がそういうと男の体は緑色の光に包み込まれて言った。シキはそれが魔力なのだと、なぜかわかった。

「いきます」

と男が言った瞬間にシキは左手で左の方向に拳を飛ばした。

「んな……！！」

「っ！！」

そこに男が現れてシキの拳は当たった。だが、それがあまりにも硬すぎて、逆にシキは手を痛めてしまった。

男はシキに殴られて、数歩その場から後ろへと下がった。

「当てられた？ オーバーマジック 魔力解放を使つてない相手に？」

なぜか攻撃を当てられたことに対して男はかなりのショックを受けていたらしい。それにしても、さっきからこの男が言っている魔力解放とは一体なんなのだろうか。という疑問がシキの頭の中に沸いていた。

とはいえ、かなりキツイ状態だとシキは思っていた。

相手へ攻撃したところでほとんどダメージを与えられないどころか、逆に手を痛めてしまう程の硬い鎧を見に纏っている敵に対して、こちらは何の攻撃手段を持っていない。

魔法で攻撃した所で躲されるのが落ちであろう。

と、そこへ。

「ちいいい！」

ガスタスがこちらへと向かってやってきた。

「こいつらやべえな。かなり強い」

「ああ。こつちも困っているところだ」

シキとガスタスは背中を合わせながらそれぞれの相手を見る。

「もう終わりにしようか」

オーバーマジック 「魔力解放で一氣に決めさせてもらいます」

そう男2人が言った瞬間に……

「倒れ伏せ、王国騎士よ！！」

「ぐあ！」

「なあ！？」

男2人が地面に倒れた。何か体に重い錘でも乗せられたかのように……

「シキ、ガスタス。大丈夫？ ごめんね？ 後ろからずっと付いて来てると思ってたんだけど、この人たちに襲われてたんだね」

セシリアがゆっくりとシキとガスタスの方へと向かって来たいた。

「ま、まさか、姫様！！？」

「へ？」

「姫？」

男の1人がセシリアの方を見ながらそう言った。姫って言うのは……？

「ごめんね、今まで黙ってた……」

——彼女は今にも泣きそうな顔をしながら笑い……

「私は、騎士国ワードメイドの姫。本名はセシリア・ルードセント・アメント、です」

そう告げた……。

7話 ゴーレムのちに騎士（後書き）

お知らせ。

来週修学旅行。そのあと検定試験。その次普通にテスト。

小説書く時間＼（＾o＾）ノ

というわけで、しばらく更新出来ないかもしれませんが。読んでくださっている皆様申し訳ございません。

8話 騎士国の王（前書き）

とりあえず修学旅行が終わり、時間が出来たので投稿します。
多分今度の更新は大分遅くなると思いますが（今でもかなり遅い）、
よろしく願います

8話 騎士国の王

彼女は俺に姫だと告げた。

そう告げた時の彼女は、とても辛そうで、儚げで……。今にも消えてしまいそうな笑みを浮かべていた。

その時の彼女の顔を俺はどこかで見たことがあった気がした。そう、どこかで。

「姫って、この国のつてことだよ……？」

「そう。私ここの姫だったの」

「なんであんな所にいたんだよ」

「色々あつてね。その騎士。私たちを国の中に入れて頂戴」

セシリアがそういうと騎士たちが動けるようになったのか、体に着いた汚れを手で掃いながら立ち上がった。

「し、しかし王になんと言えば……」

「それは私から説明するから貴方たちは気にしないでいい。出来るだけ正体隠して行きたいから馬車でも持ってきてくださる？」

「わ、わかりました」

そついうと騎士たちは体に光を纏ったまま目にも見えない速さでどこかへと飛んで行った。

「じゃあ正面から行く？ あの人たちが運んでくれるから、こつそり侵入する必要なくなつたし」

「それで大丈夫ならそれでいいけど。ってかいきなり話すようになつたなお前」

「……ちゃんと話してないと、色々と怒られちゃうからね。あんまり話すのは好きじゃないんだけど」

「そうか」

セシリアがゆっくりと歩きだしたので、シキは隣を歩くことにした。ガスタスは少しの間棒立ちになっていたが、しばらくしてシキたちが自分の近くにいないことに気づき、慌てて追いかけた。

「それにしても、本当に姫様とはねえ。呼び方も変えた方がいいかい？」

「今まで通りに接してほしいかな」

「じゃあそうさせてもらうよ。それで向かいに来てもらってどうするんだい？」

「最初はお父様に会ってもらうかなつて。色々助けてもらつたし、お礼も出来ると思うんだ」

「別にいい。って言いたいけどしてもらわなかったら何も出来ないからなあ……少しお世話になりたい気分」

「なればいい」

シキは世界の常識というものをほとんど忘れている。それを教えてくれる人が見つからないだろうかと考えていた。

「あ、そうだ。シキとガスタスに言っておくことがあるんだ」

「どうした？」

「なんだ？」

ガスタスが丁度シキたちに追いついた時にセシリアが話しかけた。

「私が掛けていた腹を満たす精霊魔法は、実はごまかすだけで、実際は何も食べていない状態なの」

「なんだとっ！？」

「そんな気がした」

ガスタスはかなり驚いているようだったが、シキは予想していたのかあまり驚いた様子はなかった。

「だから、私の王室に行ったらたくさん食べてね！」

「たくさん食べたいねえ」

「そ、それよりも頼みがあるんだが……」

ガスタスが何か言いずらそうに言った。

「どうしたんだ？」

「いやその、えーとだな」

「頼みがあるなら私じゃなくて父さんに言っで。シキは私に言ってもいいよ？」

「待てや！　なんだその扱いの違いわ！！」

「ふん」

セシリアはそれからのガスタスの言葉を全て無視していた。ガスタスはセシリアに嫌われているのだろうか？　もしかしたらあの研

究所で何かされていたのかもしれない。

しばらく歩くと、大きな門が見えてきた。

門の造りは変わっていた。大きさだけはでかいが、実際に人が通れるように造られている場所は家に入るのと同じくらいのドアだけだ。

装飾もしているが、金色に光っているだけであまり綺麗とは言えない。

門の両端には兵士が立っていた。きっと魔物が国に侵入しないように見張っているのだろう。

この国は門以外からは侵入出来ないようにだろう。門の横は石垣で防がれている。かなりの高さがあり、20メートルはありそうだ。セシリアが門に向かって歩いて行ったのを確認してシキとガスタスは後ろからついていった。

「その騎士」

「はっ！ 姫様です——」「口を閉じよ」！？」

「私のことをそんなに大きい声で言わないで。ね？」

セシリアがそう言った瞬間に見張りをしていた騎士が黙った。セシリアは自分の正体が回りにばれるのを恐れているようにも見える。

「つーかよ」

「あん？」

シキの隣にいたガスタスがシキに話しかけた。

「あの嬢ちゃんさ。あんなに強いならゴーレムの戦闘だって、クエスタとの戦いだって手伝ってくればよかったのに……なあ？」

「もしかしたら何かカラクリでもあるんじゃないか？ 今みたいに兵士に命令したりするのだってこの国の近くに来てからだし」

「後で訊いてみたとしても、俺じゃ答えてくれないだろうな……」
「俺が訊いてやるよ」

教えるかどうかは別として。という言葉をシキは心の中で思っていた。

「も、申し訳ありません！ 馬車の用意が出来ますので、こちらへどうぞ！」

「シキ。ガスタス。来て」

セシリアに呼ばれたシキたちは急いでそちらへと向かって走って向かった。

馬車に乗ったシキたちはゆっくりと進んでいるらしい。

らしいというのは馬車についてある窓にはカーテンが敷かれています、全く外の様子が見えないのである。

音と揺れで考えるとあまり速い速度では走っていない感じがする。席は2つあり、シキとガスタスが向かい合って座り、セシリアはシキの横に座っていた。

——全く、こんな殺人者がよくも懷かれたものだ。とシキは苦笑する。

「あのよお」

「なに」

「お前の親父って王様なんだよな」

「そう」

「どういう性格の人なんだ？」

「結構厳しめの人かな」

「……まじかよ」

ガスタスは一体何を王に頼もうとしているのだろうか。そんなに
凄いことを頼もうとしているのだろうか。

「セシリア」

「何？」

「王が住んで居る所までどれくらいで着くんだ？」

「えーと。結構速いペースで来てるけど、7時間くらいかかるかも」

「はあ！！？」

「なつが……い」

「でも、私がいるから大丈夫。騎士」

セシリアが窓から顔を出して馬を動かしている騎士に話しかけた。
そんなことをしたら隠れている意味がないような気がするが、シキ
は黙っていた。

「はっ！　なんでございましょう！」

「私が精霊魔法を使う。コントロールに気をつける」

「了解！」

セシリアが馬車の中に戻って来た。

「じゃあ目を瞑っていた方が楽だから、瞑って」
「いやだ」

ガスタスは何も言わずに素直に目を瞑っていた。

「シキが具合悪くなっても知らないからね？」
「はいはい」

シキがそう言つて了承すると辺りが歪んでいく感じがした。
セシリアはシキの方を見てにやにやしていた。シキが苦しむ様子を見て楽しむらしい。意外とこの子の性格は悪いのかもしれない。

「大丈夫だった？」
「結構平気だった」
「……気持ち悪い」

目を瞑っていなかったシキは平気だったが、なぜか目を瞑っていたガスタスは具合が悪くなったらしい。
どうしてだろうか。

「うん。もうすぐだね」

セシリアが窓から顔を出して辺りを確認しながらそう言った。
ガスタスは気分が優れないようでげっそりとした顔をしていた。

「それで、お前の家に言つて何すればいいんだ？」
「とりあえず、お腹すいてると思うからご飯食べさせてもらおうかなって。私を助けてくれたんだしそれくらい最初にしてもらえてもいいと思うんだ」

「飯かー。そんなもの食べるなんて久しぶりだな」

「……そんなに食べさせてもらってなかったの？」

「ちよつとな」

「……ごめん」

「なんで謝る」

「……別に」

そう言ったあとにセシリアが黙り込んでしまったのでシキも黙っていた。

しばらくすると外から何かを開ける音が聞こえた。きっと扉を開ける音だなとシキは考えた。

「じゃあ、外でようか。やっと着いたみたいだからね」

セシリアがそう言つて馬車から降りて外へと飛び出して行つた。

シキには理由がよくわからなかったが、ガスタスは心なしに笑っているようにも見えた。

ガスタスには理由がわかっているのだろうか？

「わが娘よ！ よくぞ帰つて来た！」

シキとガスタスは広い応接間のような場所に案内されていた。

しかし辺りには椅子も机も何もなく、あるのはただ少し前にいる男が座る為にある椅子だけである。

男は椅子に偉そうに座っていた。

容姿は髪が少し茶色に染まっっていて長さは肩よりも少し下まで伸びていた。

顔はどこにでもいそうな男の顔だが、顎の髭が長いのが目立っていた。

服装は黒い……というよりも漆黒の服装で闇の中にいたら目立たなさそうだった。

そこにセシリアを先頭にして、シキとガスタスが後ろに立っていた。

セシリアとガスタスは膝を付いて頭を下げているがシキは黙って突っ立っていた。特に彼に対して礼儀正しくしようとも思わなかった。

セシリアはこの国に来るまでのことを少し前にいる男に説明していた。

周りには騎士と呼ばれている者達が、シキたちを両側から挟むようにして少し距離を置き立っていた。

その数は大体20人程度だが、実力はかなりあるだろう。

だが、シキはそれよりも少し前に座っている彼のが気になっていた。

少し前に座っている男。セシリアに対して娘と言ったことから見るとセシリアの両親と判断できるだろう。だが、その男は他の者たちとは違った異質さを放っていた。

まず魔力。

これはシキだけが感じている物かもしれないが、周りにいる騎士たちの誰よりも高い魔力を持っているのは間違いなさそうだった。

そして威圧感。

これは周りの奴らも感じているに違いないものだろう。

空間自体が歪んでいるようにも見える。

シキが少し前にいる男を観察していると、ふと威圧感が消えた。

「君たちが我が娘を助けてくれたのだな？」

前に座っている男が立ち上がりながら問いかけた。

「一応そうなるな。俺もコイツには助けられたんだけどな」

「おいっ！ お前この国の王様に何て言葉使いしてんだよ！」

ガスタスが小声でシキに言ったがシキは気にしなかった。

「いやいや。気にせんでよい。逆にこんな風に話しかけてもらえることもないのでな。新鮮で心地がよい」

王はそう言いながらシキたちに近付いてくる。

王はガスタスが言った声が聞こえたらしい。かなり耳が良いのだろうか？

「父様。さつき申しましたが、彼らは私を助ける為に三日程何も食していません。どうか、速めに食事を与えてもらえないでしょうか？」

「セシリア。我も給仕には急いで食事を作るようには言った。だが、急なことであつたが故まだ出来ていないのだ。それに、少しくらいの間この者たちと会話を楽しんでもよからう？」

「それは……わかりました」

そついうとセシリアは黙った。

シキの隣にいるガスタスは何やら緊張しているようだ。

「さて、君たちには感謝してもしきれないのだが、我に出来ること

など大したことはない。が、もし何かあるのならば我が叶えられる範囲であれば君たちの願いを聞こう」

「んなつ！！ 王！ そんな奴らに何てことを！！ もしかしたら、こやつらは他国が送ってきた刺客かもしれないですよ！！」

周りにいた騎士の1人がそんなことを叫んでいた。

「黙れ！！ ならば道中で我が娘を殺していただろう！ 何せこの国の唯一の王族の女性だからな。我よりも危険な存在だ。そんな存在を他国にいて手を出さなかったんだ。十分に信用するに値する」

「……………わかりました。申し訳ありませんでした」

「失礼。それで何かあるかね？」

シキは1つだけ考え付いたものがあつた。

しかしそれはこの国の王様に対して言つてよいものなのかと言うかわからないかを迷っていると、ガスタスがシキよりも早く姿勢を低くしながら言葉を發した。

「俺をこの国に住まさせてください！」

「勿論よいぞ。君たちが他の国から逃亡して来たことはさっき聞いた。自由に過ごして構わん」

「おいおい、いいのかよ。そんなに軽く許して。俺は兎も角コイツはあつちの国の機密組織の部隊の副長をやつていた奴だぜ？ 秘密を知られたくない奴らがこの国に攻めて来たりする可能性だってあるんだぞ？」

「っ！」

シキが言つた言葉にガスタスは戸惑いを隠せない様子だった。しかし事実なのでガスタスは何も反論しないでいた。

「ふむ。確かにその危険はある。が、向こうは我の姫を攫^{むすめ}っていたということに我に知られてしまった。攻められるというならば、こちらよりも向こうの方が可能性は大きいだろう?」

「まあ……そうか?」

「それに、あちらはこの国の姫を攫うというかなり危険なことを犯している。再びこの国にいることやつをノコノコ消しに来るなどということは起きぬだろう」

「あんたがそれでいいならいいけど。……そうだ、セシリア! お前なんで攫われてたんだよ! しかも他国の奴に!」

「あはは……それはあとで説明するよ」

セシリアは苦笑いしながら答えた。何かここでは言いたくないような内容なのだろうか。

「あと、もう1つ願いがあります」

「言ってみろ」

ガスタスが再び口を開いた。勿論姿勢は低くしたままだ。

「俺をこの国の騎士隊に入れさせてもらえないでしょうか!」

「……それを決めるのは我ではない。騎士隊のテストを受け、合格したならば自由にするがよい」

「ありがとうございます!」

そう言ってガスタスは頭を床に着けるまで下げた。そこまで嬉しいことだったのだろうか。シキにはよくわからなかった。

「そちらの少年よ。君は何かあるかね?」

「ええ。俺は貴方にお願ひがあります」

「なんだ?」

シキは1回深呼吸をした。

「この世界にある魔法の種類、常識、世界観を全て貴方に教えてもらいたい!!」

「んな!!?」

シキがそれを言った瞬間にこの部屋にいた騎士たちが驚きの声を上げていた。

周りがざわざわとしている。

「ほう……他の騎士ではなく、この我に教えを乞うというのか。くく……! 面白い!」

そう言つて王はにやりと笑った。何がおかしいのかはシキにはわからなかったが、とりあえず王が何かを言うまで黙っていることにした。

「それで、我に教えを乞うのはなぜだ?」

「貴方がこの部屋の……いや、もしかしたら国なのかもしれないけど、1番強い気がした。ただ、それだけ」

「ほう、我の力を感じ取ったと?」

「ああ。貴方の力はこの部屋にいる誰よりも異質で、強力な力を持っている気がした」

「くくく! なるほど……」

そう言つと王はクルリと体を反転させ元の椅子に座っていた場所に戻って行く。

シキが答えを貰えないのか? と少し慌てていると王がシキに背を見せながら言った。

「いいだろう！ 教えてやろうではないか。王と言っても暇な時が多くてな。だが、その前に少しテストをさせてもらう。我がお前を教えるに足りんと思った時は悪いがこの願いは拒否させてもらう」

「十分だ。それは今すぐやるのか？」

「何を言っている？ 腹ペコなのだろう？ テストは食事をしてからだ。そっちのお前は後で我が騎士に話をつけておく。そやつの案内に従うがいい。少年。お前があと何かを望むというならば、あとで聞こう。どうやら食事が出来たようだ」

そう言つて王は座っていた椅子の向こうへと移動して行つた。

王が向こうに行つてからセシリアが不安そうな顔をしながらシキに近付いて来た。

それに対して、シキは大丈夫だ、と安心させるかのように笑顔で

答えた……。

9 話 王の提案（前書き）

遅れてしまってすみませんでした。

9話 王の提案

「父様に教えてもらうなんて、シキは死ぬ気？」

王と話終わってからすぐに周りにいた騎士の1人に食堂へ案内してもらい、シキ達はそこで食事を取らせてもらった。

食堂の右と左の端の所にほとんど無表情の女の人が5人ずつ待機していて、その全ての視線がシキに向いていたのでシキはちよつと怖くなっていた。

シキが周りの女の人に見つめられているのが気になってチラチラとそちらを向いていると、セシリアが視線をこちらに向けるなど命令してくれた。そのあとに彼女たちはここのお手伝いさんで、シキのことを気に入ってたんじゃないのかなとセシリアがシキの耳元で囁いた。

食事を食べ始めた時に、最初はあまりお腹が空いているという感じはしていなかったのだが、1口食べる事に段々と食が進んでいた。

シキはセシリアとガスタスの中では1番食べていた。
ガスタスはまだ食べられそうであったが、どこか遠慮しているよ

うな雰囲気が見えた。

今は食事が終わったあとで、周りに待機していたお手伝いさんが食事を片づけてくれていた。

「何言ってるんだ？ 俺は死ぬ気なんてないが」

食事を終えたあと周りには食事を片づけているお手伝いさんと、どこかそわそわとしている感じを見せているガスタスしかない状況でセシリアが言った。

「……そういえば、シキはこの国の人間じゃないもんね」
「そうだ」

しまった……とセシリアが言いながら頭をがつくりと下げた。
何かおかしいなことでも言ったのかとシキは考えるが、何も思いつかない。

「じゃあ私が父様のこと少し教えてあげるね」
「ああ」

「私の父様は昔は教育の魔王と呼ばれてた人なんだ」
「ほう」

「その頃に教育された騎士って言うのは今父様の周りにいる人たちなんだけれど、最初何人くらいいたと思う？」

その前に王の周りにいた騎士は何人いただろうかとシキは考えたが、そんなことはもう覚えていないので適当に50人と答えた。

「残念。5000人だよ」

「酷いな」

「ちなみに今残っているのは24人だから」

「凄い確率だな」

「だから、あそこにいる人たちはかなり強いから喧嘩とかしちゃう駄目だよ？ 怪我してほしくないから」

「わかったよ」

シキはつまらなさそうに返事した。

「それで、話戻すけど。5000人のうち4976人の人は途中でリタイアしたり、自分でやめちゃったり、死んじやったりしてるの」「はあ？ 死人出てるのかよ」

「そう。4976人のうち500人は訓練で死んじやったんだって。その他の人たちは生きてるけど身体に影響があったりとか。多分父様は私を助けてくれたシキに本気で戦うことはないと思うけど、駄目だと思ったら絶対降参するんだよ！ 父様がシキを認めなかったら私が腕のいい人に頼んでみるから」

「ああ、心配してくれてありがとな」

シキはポンポンとセシリアの頭を撫でた。

「……こんなに心配してるのに」

「大丈夫だって。俺はある事をやるまでは死なないよ」

「ある事？」

セシリアはキョトンとした顔になり首をかしげた。

「姫様。お風呂の準備が出来ました」

「あ、わかった」

丁度その時にお手伝いの1人がセシリアに風呂の準備が出来たことを伝えるにやってきた。

思えばあの研究所でドロドロに汚れていた彼女が、このままの姿で過ごすわけがない。シキは自然に見慣れていた姿だったので、特にセシリアに対して違和感がなかった。

「じゃあ気を付けてね。シキ。しばらく会えないだろうけれど」

「ああ。わかった」

「またね」

そう言っただけで彼女はお手伝いさんの方へと向かって行った。
食堂に残されているのはシキとガスタスだけである。

「ガスタス」

「なんだ」

「お前は何でこの国の騎士になりたいんだ？」

「ちよつと、あつてな。まあ……そのなんだ。昔の憧れって感じかな」

「憧れ……か。騎士になって何かしたいとか。考えてんの？」

「全然」

「そ。まあどうでもいいが」

「そういうお前は王様に色々と教えてもらつたが、何か目的でもあるのかよ」

「ああ、色々とな。強くなけりゃあやりたいことも出来そうにないしな。ここは俺のいた場所とは違って強い奴がたくさんいそうだしな」

「そりやおめえあの聖都と比べたらそうじゃねえか？」

かもな。とシキは答えて笑った。

シキが言った意味は自分の元いた世界という意味で言ったのだが、ガスタスが理解できないのも無理はない。

彼はこの世界の住人なのだから。

「ガスタス様。シキ様」

シキが再び語りかけようとすると食堂の入り口の方から声かけられたので、シキは黙って声のする方へと振り返った。

「シキ様。王様がお呼びですので、私の後ろの通路を通ってそのままお進みください。ガスタス様は私の後ろへ付いて来てください。貴方の案内をする騎士の下へご案内します」

シキは立ち上がってガスタスの方をみて一言。

「じゃあな。また会った時は……別にどうでもいいか」

「おい。何にもなしかよ」

「俺とお前は元は敵同士。無理に仲良くななくてもいいしな」

「……それも、そうだったな」

ガスタスは少し寂しそうな顔をしていたが、シキはもう通路へと向かっていた。

通路を歩いていくと広い部屋へと出た。

シキが辺りを見渡してみても王はいなかった。ただ単に遅れているだけなら待っていようとも思ったが、呼んでおいてそれはないと思う。もしかしたらすっぱかされたのかもしれない。いやそれはないだろうが可能性の1つとして考えておく。

部屋はちょっと段差がある程度の何もない部屋だった。ここで騎士たちの演習やら集会などでもやっているのではないか。と思考してみる。

壁の色は白で統一されていた。床の色も白だったのだが、目立つた汚れはなく綺麗に光っていた。

「綺麗な部屋だな……」

思わず声に出す。こんな汚れもない部屋で普段は一体何に使っているのだろうか。

「すまないな。少し遅れた」

そう言つてシキの後ろから王がやってきた。左右の手に剣を1本ずつ持ちながら。

「少年は剣も使うのだろうか？ 我が国の騎士たちが使うものを持ってきた」

そついいながら王は壁に剣を2本とも立てかける。

「さ……てだ」

王はいいながらシキを追い越して反対側の壁の方まで歩いて行く。シキは付いていかなかった。

「何を教えて欲しい？ 我は少年の国のことは知っているが、教育状況までは知らんのだな」

「とりあえず魔法を。サイレントマジック無音魔法、オーバーマジック魔力解放。この他にも魔法があれば教えて欲しい」

「ふむ……。少年の国では我が国では基本とされるものも教えては
いないのだな。ならばまずは種類だけでも教えておこうか」

「おいおい。テストとやらないのかよ」

「まだ、よい」

そういつと王は辺りを歩きながら説明を始める。シキはその様子
を目で追う。

「我が国では基礎魔術、サイレントマジック、無音魔法、アトルマジック、属性魔法、ディフシヨナル、魔力拡散、オーバーマジック、魔力解放、リミッタ
この5つを基本としたことが知られている。そしてその奥に限界
ブレイク突破、フルドライブ完全なる顕現という自らを危険にさらすことによって使うこ
との出来る魔法が存在している」
「っー！」

シキは自分の知らない魔法がたくさん並べられて驚いた。やはり
ここは前のいた世界と同じなどという甘えことは考えないことだな
とシキは思った。

「基礎魔術は……知っているな？」

「エクストラ最上級魔法術とかか？」

「そうだ。少年がどこまで使えるか。それはどうでもいい。知りた
いのは知らない。使えない魔法であろう？」

「ああ！」

「と、なるとやることは多いな……。まあテストに合格出来ればだ
が」

シキは咄嗟に身構える。

テストというからには魔法や体術を使う実技だと予測しているか
らだ。

「なに。簡単だ。私の1撃を食らって立っていることが出来れば合格だ。ただし魔法を使って防ぐのは禁止だ」
「！！」

そう言った瞬間に目の前の景色が白一色になった。

いや白く感じるのはあまりにも強烈な光が目の前に現れたから白く感じているのだろうか。

それが王の放った最上級魔法術ということに気が付くのに数秒掛かったが、問題はない。

ただ、受け止めるだけなのだから。

シキは手で顔を隠しながら足でその場に踏みとどまるように力を込める。

魔法を使って防いではいけないらしいが、魔法以外にどうやって防ぐのかがわからなかったたので、その場で衝撃に備えることにした。そうした瞬間王の放った最上級魔法術がシキに衝突した。

「ほお」

王はシキがいた方を見ながらそう言った。

確かに魔法を使って防ぐなどは言ったが、まさか本当に何もしいとは予測していなかったのだ。

今は魔法を放った影響でシキのいた方が煙幕でよく見えない。

「これは……やりすぎたか……」

勿論死ないように手加減はしてあるので命に別状はないだろうが。

魔法で起きた煙幕が段々と晴れて行くと、そこには人影があった。

「痛えな……。あんたは娘の恩人を殺す気か？」

「ちゃんと手加減はした。よく意識を失わなかったな」

シキは楽勝だ。と王に言いながら、本当はふらふらの脚に力を込める。

勝利条件は王の1撃を食らって立っているということなのだから。

「では約束通りまずは魔法を教えよう。とりあえず座るがよい」

と王は言って自分も床に座った。

それを見たシキもゆっくりと床に座る。

「教えると言ってもだな、実を言うとやり方とコツを教えることしか出来ないんだ。そこからは個人で頑張ってもらうしかない」

「十分だ。よろしく頼む」

「そうか。ならば最初は無音魔法サイレントマジックからいこう」

そういうと王はシキから見て左に手をかざし、そこから下級魔法を放ってみせる。

「これが無音魔法サイレントマジック。素早さだけを求めた魔法だ。最初は呪文を少し省略しながら練習していくといい。そのうち自分で感覚がつかめるようになる」

「貫く槍センチタリム」

シキは言われた通り呪文を省略して唱えてみる。

すると手からいつもの10分の1くらいのサイズの魔法が放たれて、いつもの10分の1くらいの距離まで飛んでいき、消えた。

「お、出来た」

「ほう！ 飲み込みがはやいな！ だが、まだまだ威力が足りないな！ まあそこらは自分で鍛えていくといい」

「わかった」

アルトマジック

「それでは次だ。属性魔法は、だな。自然と身に着く。それは魔法の練習をしている時や、敵と戦っている時。色々パターンはあるが、こいつは自分で鍛えて使えるようになるような物ではない。だから、これは我にも教えられん」

「そうか」

シキはその魔法自体がどのようなもののかもわからないのだが、とりあえず頷いておいた。

ディフシヨナル

「魔力拡散は、自らの魔力を空間にばら撒くようなものだ。このように」

王がそう言った瞬間、シキは嫌な感じを体にした。

例えるのなら森で出会ったLEVEL6の魔物と対峙しているような、とても嫌な感じだ。

ディフシヨナル

「これが魔力拡散。ほとんど使い道はないが、まあ自分よりも弱い相手なら怯ませることが出来る」

ディフシヨナル

そう言って王は魔力拡散を解いた。

シキを襲っていた嫌な感じはなくなった。

「てことは俺は貴方より弱いってことか……はあ」

「普通の者なら意識を保つことすら出来ないがな。最後だ、オーバーマジック魔力解放だな」

王はそついうと立ち上がり、自分の体の周りに緑色のオーラを纏わせた。

「これが、オーバーマジック魔力解放。自らの魔力を己の力に付属させたり、防御として扱うことも出来る優れた魔法だ」

「……！」

「これを扱うことが出来ればリミッターブレイク境界突破や完全なる顕現を使うことも出来るようになると言ってもいい。この魔法の延長線上にあるのがこれら2つだからな」

「……そうなのか」

「ただし、自分の命を削る行為となるかもしれないがな。オーバーマジック魔力解放を使うコツは自身の魔力を自分の身体に纏わせる感じた。それだけでオーバーマジック魔力解放は発動することが出来る。勿論人によって差違は出るがな」

シキは自分の周りに魔力を纏わせるという行為をどうやるかが理解出来なかった。

「誰も1回で成功させるとはいわん。そんなことが出来たら苦労はしないからな。それに、早く覚えすぎると大変なことになるしな」

「……？ 大変なことって？」

「それは知らなくてもいい。むしろ、知るな」

「……わかった」

王が教えてくれなければ知る手段などないので、シキは潔く諦めた。

「でも早くつてどれくらい早くなんだ？」

「1日に1回が限界だな」

シキはその程度なら問題ないな。と心の中で納得する。

「とりあえず私の知っている魔法は全て教えた。すまないが、ここからは個人で練習するしか習得出来ないんだ。我が出来るのはここまでだ」

「ああ！ ありがとう。俺1人だったら何もわからないまま他の奴らに殺されてただけかもしれないんだ。貴方には十分感謝している」
「そう言ってもらえれば嬉しいものだ。そうだ、まだ少年の願いがあれば叶えると約束したな。何かあるか？」

「ん？ えーと、出来ればこの国の地理とか色々教えて欲しいものはたくさんあるんだけど」

「あ、ああ！ そう言えばそういう話もあった！ すまない。忘れていた。だが、ここで提案があるのだ」

「？」

「我は王とはいえ、完璧にこの国のことを理解しているわけではないんだ。恥ずかしながら、我は勉学が嫌いだな」

「へー」

シキは王というからには国の全てを把握していると思っていたが、実はそうではないらしい。

「それで少年が望むのなら我が国の学び舎に編入させることも出来る」

「そうなのか。でも本当に基本的なことでもいいからこの国のことを教えてもらえないか？」

「うーむ。基本的なことと言えば、まず我が国ワードメイドは14

2 区分にわけられている。今我らがいるこの王城は1区だ」

「142つて……広いな」

「全ての区画が同じ大きさというわけではないのだがな。とはいえ、巨大なのは変わらないがな。少年は地下迷宮というのは知っているか？」

「知らないな」

「……聖都の教育はかなり遅れているのか？」

王は小声で言っていたが、シキにはバツチリ聞こえていた。

「地下迷宮というのは、魔物の巣窟みたいなものだ。この国に2ヶ所。魔物の森に7ヶ所ある」

「で、それが何なんだ？」

「町にある地下迷宮は比較的に安全なのだが、魔物の森にある地下迷宮は危険だ。それが7ヶ所あるんだ。何か思いつかないか？」

「??？」

シキはよくわからない。

その様子を見て王はにやにや笑っている。

「伝説のLEVEL7の魔物は知っているか？」

「ああ」

「魔物の森の地下迷宮の1番奥深くにLEVEL7の魔物は存在されていると言われているんだ。地下迷宮の数は7。LEVEL7の魔物の数も7。今までに最深層まで探索を済まされている地下迷宮は今の所はない。どうだ？ 面白そうではないか？」

「興味はあるな」

「うむ。そのうち力をつけたら行ってみるとよい。地理に関してはこの程度知っていれば問題なからう。何がどこにあるかは自分で把握してくれ。我は知らないのだな」

「わかった」

結構適当な感じだが、自分で歩いて探してみるのも楽しそうだとシキは呑気に考える。

「それで編入の件だが、どうする？」

「あー。頼む。でも俺は住む所とか、金とかないぜ？」

「それは我に任せろ。少年の学び舎に通う金は我が出そう。住居については、学生寮に入ってもらって構わないか？」

「勿論だ」

「悪いな。俺は大したこともしてないのにそんなに揃えて貰って」

「いいんだ。逆に我にはこの程度のことしか出来んのだよ。そうだが編入する学び舎の魔術LEVELはどうする？　そういえば少年はどの程度の魔法を使えるんだ？」

「最上級魔法術使い」
エクストラ

「そうか、最上級魔法術使いか……はあ！？　最上級魔法術使い！？」

王が予想以上に驚くのでシキの方が戸惑ってしまいそうになった。
エクストラ
シキが元いた世界では最上級魔法術使いは少なかったが、そこま
で驚かれることはあまりなかったはずだ。

「まさか、世界に15人といない最上級魔法術使いの内の1人が少年とはな」
エクストラ

「そういう貴方もそうなんでしょう？」

「……最初の1撃でばれていたか」

「勿論。あの大きさの魔法を食らって最上級魔法術って気付かない方がおかしい」
エクストラ

最上級魔法術を使える人間がそんなにも少ないのかとシキは驚い
エクストラ

てはいたが、この世界は前の世界とは違うということでも無理矢理納得させていた。

「一応少年は中級魔法使いとして学び舎に編入してもらおうか」
「なんで中級なんだ？」

「この世界に15人といない最上級魔法使いとして学び舎に編入し、余計な者たちに目をつけられたくはなからう？」

「別にどっちでもいいけど。でも、俺は最上級魔法使いってのを隠し通せる自信はないぜ？」

「ばれた時はそのときだ。気にしないでいい」
「わかった」

「では、学び舎に編入するに当たって色々と手続きが必要だな。最低でも3日はかかる。それまで町を見学したりしてくるがよい。あとで城の部屋を貸そう」

「ありがとう」

シキがそういうと王は出口の方へと歩いて行き、最初この部屋に來た時に壁に立てかけておいた剣を手に持った。

「少年。剣は使うか？ 使うのなら差し上げよう」

「できれば1本くれ。それと最後にもう1個訊いていいか？」
「なんだ」

「この国に精霊魔法使いは何人いる？」

シキは結構気になっていたことを王に訊いてみた。
そんなことはわからないと言われると予想していたが……。

「ん？ 精霊魔法使い？ そんなに珍しい者でもないぞ。この国の女性の9割は精霊魔法使いだからな」
「は……？」

「我は書類の手続きに入る。あとで迎えの者をそちらへ送る。部屋まで案内してもらおう」
「3日後にでも会おう」

シキの中では本日1番衝撃的なことを発言した王は、出口からどこかへと消えてしまった。

シキは改めて思った。

この世界の常識はおかしいと。

9話 王の提案（後書き）

周りの説明が苦手な私です。

最近忙しいので更新速度が遅くなりますが、出来るだけ早くあげれるようにします。

10話 騎士長（前書き）

今回から登場人物たちの心の中で思っていることを（ ）で書くようにしました。

10話 騎士長

シキと王が丁度テストをしていたときに、城の外でも同じようなことが行われていた。

「つつつつつ！」

「どうした？ 貴様の力はその程度なのか？」

全身を金色の鎧で包み込んでいる騎士が、くぐもった声で目の前で四苦八苦している男に問いかけた。

騎士は顔も手も胴体も足も何もかも鎧で覆われていて、声も聞き取り辛いので、性別もよくわからなかった。

騎士の手には全長80センチ程度の木刀が握られている。今目の前の男と行っているものは、あくまでテストであり、殺し合いなどではないからだ。

「ハンデとして私はこの短い木刀で相手してやっているのだぞ？
私に1撃くらい入れて見る」

「……くそっ！」

悪態をつくのは大男ガスタスだ。

彼は食堂でシキと別れたあとにこの城の外にある訓練場まで案内された。

そこで全身を鎧で包み込んだ、男か女かもわからない騎士にテストをすると説明された。

ルールは簡単だった。

目の前にいる騎士はこの騎士隊の中での長の役目リーダーを負っている。
その騎士にガスタスが1撃でも攻撃を与えればテストには合格という話だった。

テストを始める前に、武器は必要か？ と問われたが、今までガスタスは拳1つで戦ってきたので武器は使用しないでテストを受けることにした。

だが。

（こいつ！ 強いなんてもんじゃねえ！！）

たかが1撃。

なんということはない簡単なものだと思っていた彼はかなり後悔していた。

相手は武器を持っているとはいえ、ハンデとしてかなり短いものを選んでくれ、さらには実力の5分の1も出さないと約束してくれていた。

なのに自らの攻撃は掠ること、いや近付くことも許されていなかった。

「王の推薦だと、期待していたのだから」

「っ！ うおおおおおおお！！」

自ら声をあげ気合いを入れながら相手に突撃する。

その様子を見ながら騎士長は何もすることもなくただ彼を見守っていた。

ガスタスの拳が初めて騎士長に近付くことが許された。だがそれは彼の實力ではなく、騎士長が何もなかったからだ。

騎士長はガスタスの拳を木刀を持っていない方の手で受け止めた。騎士長は手にも鎧を付けているので、痛みとしてはガスタスの方が上であろうが、彼はとくに気にすることはなかった。

「ふむ。魔力解放なし。オーバーマジック。ただの腕力でこの程度か。よく貴様はここまで生きてこれたな」

「くっ！」

「さて。ルールの説明を1つし忘れていたので、言っておこう。貴様が気絶した時点でこのテストは終了だ」

「っ！？」

騎士長はそう言うのと木刀を持った手でガスタスの頭を打ちつけようとする。

その前にガスタスは手を頭の上にやり防御する体制となる。カウンター

（反射物理防御魔法術で返す！ロアグレーデ 例え俺が下級魔法使いだとしても跳ね返せるはず！）

彼は下級魔法ではあるが、防御魔法を使うことが出来る。

下級魔法の防御魔法黒鋼の盾は指定した範囲50センチ程度の周りを防ぐことが出来る。ブロート

そして反射物理防御魔法術を使えば、相手の攻撃をそっくりそのまま2倍の威力で返すことが出来るものなので、成功すれば相手の木刀は弾かれるであろう。カウンター

ガスタスの得意な技は反射物理防御魔法術であり、それを失敗するなどということはほとんどない。

もちろん自身の魔力で耐久力が変わる防御を貰かれてしまつては
終わりなのだが、反射物理防御魔法術を成功させていれば、防御が
砕けると同時に相手にもダメージがいくのだ。ただし、防御が破壊
されたときの反射物理防御魔法術の威力は2倍ではなく、攻撃をそ
のまま返すという形になる。

騎士長が木刀を振るつた瞬間を見計らつて、ガスタスも手に防御
魔法を纏わせる。

しかし、

「があつ!？」

騎士の木刀の攻撃にガスタスの防御は呆気なく破壊され、そのま
まガスタスの頭を強打した。

ガスタスは地面を転がりながら騎士長から距離を取る。

(なんでだ!？ なぜ反射物理防御魔法術が出来ない!？ それに、
ただの木刀でなんでここまで衝撃が来るんだよ!！)

ガスタスの防御は発動していた。

タイミングは合っているはずなのだが、騎士長にはダメージが見
えない。

ガスタスは十分と距離を取つたので、起き上ろうとしたが、身体
のダメージが大きく立ち上がることが難しくなっていた。

その様子を見ながら騎士長はガスタスに問いかける。

「ん……。もしかして、貴様はこちらの国でいう反射使いなのか？」

「ぐ……。！ そうだが、それがどうかしたのか」

「やはりそうか。悪かったな。それならそうと最初に言ってくれ
ばいいのにな」

そついうと騎士長は地面に木刀を突き刺した。

「少し休憩と言う名の講座をしようではないか」
「……」

騎士長は立つたままだったので、自然とガスタスは騎士長を見上げる形になった。

「私たち騎士は基本的に魔力解放オーバーマジックを使って戦闘を行う。滅多なことがない限りはこれが基本の戦い方になっている。貴様は使えるのか？」

「……いや、使えない」

「そうか、ならば入隊することが出来た時に教えてやろう。と、それは置いておいて、魔力解放オーバーマジックは便利だ」
「？」

ガスタスはそういう魔法があるというのは知っていたが、詳しい使い方は知らないので、便利と言われてもピンと来ない。

「今私はこの全身と木刀に、本当に薄くだが魔力を纏わせている。まずはこれを理解しろ」

「……わかった」

「うむ。では次に魔力解放オーバーマジックは纏わせる形を変えることが出来ると言おう。これで貴様の反射使いカウンターとしての力が発揮できない理由がわかったか？」

形を変えることが出来るということは、別にその魔力自体を全て均等に纏わせなくてもいいというわけで。

例えば身体と武器に纏わせる魔力の形をギザギザにしたり、剣の先に魔力を集中させ尖らせたり、相手にぶつかる瞬間に形を変えたりも出来るわけで……。

「そうか、俺の魔法が展開される瞬間に形を変えたり、剣の表面に薄く形を変えた魔法を使っているのか……」

「そうだ。だからほとんどの騎士たちには反射は効かない」

「なるほどな……。それはきつい状態だ」

「さて、どうする？」

それはこのままテストを続けるのかという問いなのか。それともどうやって戦いを進めるのかという問いなのか。

だが、答えはすぐ出た。

どう戦いを進めるかなんてわからないが、テストをここでやめるなんてことは絶対はない。

「やるに決まってるだろ！！」

「ん……。まあこの程度でへばるようじゃ王も推薦しないとは思っていたんだけど。じゃ後半戦やりますか」

騎士長は木刀を地面から引き抜いてガスタスの方へと向けた。

（下手な小細工をしても、この人には勝てない。なら、真正面から行くしかねえよなあ！！）

ガスタスは思い切って全速力で騎士長に向かって突撃する。

「これだけ私の攻撃を食らって、真正面からとは中々勇氣のある奴じゃないか」

騎士長はそういいながら木刀をガスタスに叩き付けようとする。

一般の人間ならば、ガスタスの速さは目で追うことが限界なのだが、騎士長は正確にガスタスを捉えていた。しかもこれで実力の半分以下というのだから、騎士長はどれほど強いのだろうか。

「ちい！」

「一々声に出す癖も直した方がいいかもしれないな？ 少しなら問題なくても、一々声に出していたら結構体力を使うものだ」

ガスタスは自らに叩き付けられそうになっている木刀を横に転がることで避けた時に騎士長がガスタスに向けて言った。

（と言われてもこれはもう俺の癖みてえなもんだよな……）

声に出さない方がいいと言われても、もはや癖がついてしまっているの、治すのに苦労しそうだと内心で苦笑した。

ガスタスは横に転がった状態から起き上がった瞬間には、再び騎士長の木刀が自らに迫ってきていた。

（いちいち全部避けていてもいつかはあたるか……）

内心でそう考えながらも自然と避けようと、身体が勝手に反応してしまっている。

1 撃当たって反撃した方が体力的にも、勝率的にも良い気もするが、中々どうしてあの痛さを味わったガスタスは攻撃を味わいたくない。

「まだハンデが欲しいか？」

「っ！ 要らねえよ！」

ガスタスは再び騎士長から距離を少しだけ取り、そこから一気に体当たりする勢いで騎士長に向かって行った。

しかし騎士長は慌てることなく横に移動することでこれを回避する。

ガスタスの勢いはとても速く、騎士長との距離も短かったので、普通の人間ならば反応は出来ても避けきけることは出来ないはずだったのだが、普通ではない騎士長には簡単に避けられてしまう。

「その程度では当たらない」

一瞬挑発に乗って声に出す所だったが、先ほど騎士長に「さあ、出すのをやめろと言われたばかりだったのではなんとか我慢することが出来た。」

ガスタスは覚悟を決めた。

（もう木刀が当たろうが構うか！ ぶっ潰す！）

ガスタスは己の最大の力を振り絞って騎士長に殴りかかった。

それに対して騎士長は木刀ではじき返そうとする。木刀には魔力解放で魔力が纏わされているはずだったが、ガスタスはもう気にすることをやめている。

「なっ!？」

彼の拳が己の振るった木刀に当たったことに驚いたか騎士長が驚愕の声をあげる。

ガスタスの拳は多少傷ついたものの、まだ十分に握れた。

拳とぶつかった木刀はなんのダメージもなさそうだったが、押し返すことが出来た。これは騎士長が手加減をしてくれているからだろう。恐らく騎士長が本気を出していたらガスタスの拳は折られていたかもしれない。

「おおおおおおおお!!」

ガスタスはそのまま騎士長の顔面目がけて拳を振るう。

ガスタスの勝利条件は騎士長に1撃攻撃を当てるだけだ。次に来る反撃のことなど考えなくていいのだ。

騎士長の顔は鎧に隠れて見えないので、顔に傷痕が残ることはないだろうから問題ないだろう。

ゴンッ! という鈍い音が響いた。

それはガスタスの拳が騎士長に届いた音だが、ガスタスの拳はあまり無事と言える状態ではなくなっていた。

ガスタスは1つ勘違いをしていたのだ。

オーバーマジック

彼は先ほど騎士長の説明してくれた魔力解放のことを忘れており、騎士長の鎧にも薄く纏まとっていることも覚えていなかったのだ。

なので、

「痛ったああ!!!!?」

「馬鹿者。私の言ったことを忘れていたのか?」

呆れたように言う騎士長だが、それどころではないガスタスは訊いてもいない。

元々木刀を軽く振るっただけで大打撃を与えることの出来る魔力解放なのだ。全力で撃ちこんだ拳がどうなるかなど、語るまでもない。

「どうにしても、テストは合格だな」

「……うぐっ」

激痛ながらも喜びの声を上げたかったガスタスは変な声を上げた。その様子を見ながら騎士長は金色の鎧の兜を手で取り外した。

「っ!!?!?」

「どうかしたのか?」

ガスタスは騎士長の性別は分からなかったが、多分男であろうと予想していたわけで、まさかその鎧の中からもすごい美しい女性が見れるなどと考えてもいなかったので言葉に表せられない程に驚いていた。

騎士長はまだ顔しか見えていなが、ガスタスはそれだけで全体の美しさを想像していた。

「ふむ。お主にはまず魔力解放オーバーマジックを覚えて貰おうか。それを覚えればかなり強くなりそうだな」

そう言いながら騎士長はガスタスに近付いてくる。

「な、なんですか!？」

「いやー。貴様は他の奴に育てさせようと思ったが、やめよう」
「!？」

「私が直々にお前を鍛えてやる。強くならないと承知しないぞ? 騎士隊はお前が思っているよりもきつと大変だ」

そう言いながら騎士長はにこりと微笑んだ。

その様子をガスタスはただ茫然とした様子で眺めているだけだった。

11話 第21学び舎（前書き）

今年最初の投稿。

あけおめです

11話 第21学び舎

王と話し合いをしてからもうすぐ3日経とうとしていた。

シキはあのあと部屋へ案内してもらい、食事の時間や風呂の場所などを（セシリア曰く）お手伝いさんに教えてもらいそれから自由にすごしていた。

と言っても部屋に籠ってダラダラと過ごしていたというわけではない。

お手伝いさんに教えてもらった、使ってもいい魔法の練習場という所に行って魔力解放の練習をしたり無音魔法の練習をしたりしていた。

1日に2つ以上違う魔法を覚えると大変なことが起こると王に教わったので、1日交代で練習していた。

サイレントマジック 無音魔法の練習はあまりうまくいっていなかった。

呪文を無言で唱えることは出来るようになったが、ほとんど威力がない。

エクストラ 最上級魔法術も使えるようになったものの、威力はいいところ対

象に石を投げつけて与えられる程度のダメージしかない。

オーバーマジック 魔力解放というところはかなりうまくなったといえる。

と言っても完璧に使えるようになったというわけではないのだが、シキは満足していた。

身体に魔力を纏わさせることが出来るようになったがその範囲はごく1部分。

手に纏わせれば、他の脚や胴体に纏わせることは出来ないし、安

定して纏わせていられるのは数十秒程度だ。

それでもシキは満足していた。

なぜなら魔力解放オーバーマジックで身体のスปีドを上げれるようになったからだ。

前の世界にいた頃……とまではいかないが、そこそこスปีドは出るようになった。

それに、魔力解放オーバーマジックを1部分に纏わせている限界は数十秒だが、その間に他の部位に移動させてしまえば、魔力解放オーバーマジックを続けることがわかった。

なので、脚力↓腕力のように魔力を移動させれば使える時間は伸びるし、脚力↓腕力↓脚力という風にループさせても使えるらしいので、無限に使えると言ってもいいだろう。

魔力が少し心配にもなるが、やはり最上級魔法術使い（エクストラ）。この程度ではあまり魔力は関係しないようだった。

とここまでシキ1人でやったようにも見えるが、実は協力者がいた。

王子、ウユリス・ルードセント・アメット。

この国に3人いる王子の1人らしいのだが、なぜかシキが魔法を練習しているとそこに現れて魔法の練習に付き合ってくれた。

王子という立場であるはずなのだが、王と同じくやることなくて暇だということと色々としきに教えてくれた。

（あいつがいなかったら、まだここまで魔力解放オーバーマジックを使いこなすことも出来なかっただろうなー）

シキは部屋にあるベッドに仰向けに寝ながらぼんやりと考えていた。

ここ2日ベッドで寝ようとしてみたものの、寝れたことは1度もなかった。

壁に寄しかかる形では寝れたが、どうやら身体はベッドで寝るこ

とを拒んでいるらしい。

（面倒だよな）

面倒というのはこの身体のことだ。

シキにとつては寝ていたのと同じような感覚だが、あの世界の生物を全て殺すまで寝ていなかったらしいこの身体はベッドで寝るということを拒むらしい。

（そろそろこの部屋ともお別れか）

学び舎には王が直接案内してくれるということなので、時間になったら王の場所まで案内してくれるお手伝いさんが部屋にやってくるだろう。

と言っても今はまだ深夜12時になるかならないか。という時間なので、あと7時間は向かいには来ないはずだ。

王もそんなに速くに学び舎に向かうとは言っていないはずだ。

（寝るか）

寝れるかどうかは別として。

シキはベッドから起き上がり壁に寄りかかりながら目を瞑った。

……ゆさゆさ。

……ゆさゆさ。ガタッ。ガタガタガタガタガタガタ

！！

「だー！！？　なんだ！？　敵襲か！？」

「違う。私」

シキは自分の身体が激しく揺れているのを感じて起きた……らしい。

敵はいなく、いたのはセシリアだった。

セシリアは3日前に別れたときの汚れた服装ではなく明るい色の着物を着ていた。

「なんか用？」

「お父様が呼んでるから私が来た。多分もう会えるのはしばらくないだろうから」

「あー寝てたのか」

起きてすぐなのでシキの頭は少しぼんやりしている。

「もう9時だよ。いこ」

「あー」

セシリアに手を引かれてシキは部屋を出た。

「よく来てくれた」

「お？　おー王様じゃないか。おはようございます」

「少年は寝惚けているのか？」

「寝起き5分ですお父様」

「ちよ、それ言わないでくれよ」

シキが案内されたのは最初王に会った場所だった。
前にそこで会った時と同じで王は椅子に座っていた。

「少年を中級魔法術使いとして学び舎に入学させると言ったな」
インタデメリー

「ああ」

「最初は中級魔法術使いしかない学び舎へ少年を入れようと思ったのだが、残念ながらそうはいかなかった」

「そうか」

「少年には沢山の者がたちが集まっている81区の学び舎に行ってもらうことになった」

「！？ お父様！！ そこは！」

「わかつてる。すまない少年。私の力を使っても今の時期に入学させる場所はそこしかなかった」

「え？ 別にいいよ。無理言ってるのはこっちなんだし。1つ聞きたいんだけど、そこってそんなに酷い所なのか？」

「我にとってはそうでもないのだがな。気の弱い者にとっては……まあ悪い所みたいだな。まあ大図書館とも言われている所もあるらしいから、勉強では困ることはないだろう」

「そうか。ならいいや」

「シキも適当すぎると損するよ？」

「いいんだよ。これで」

「ふーん」

「ではこれから我も一緒に同行しよう。学び舎の長とも少し話したいのでな。言っておくが、出来るだけ最上級魔法術使いというのエクストラは隠しておくのだぞ？」

「はいはい。セシリアもありがとな。また会おう」

「……お父様、私もいつちや駄目？」

セシリアが王に近付きながら尋ねた。

「うーむ。お前はまだこの国に帰ってからまだそう経っていないし、大人しくして欲しい」

「うー……」

「そう唸るな。少年からも何か言っただけでいい」

「え？ ……うーん。あんまり親を困らせてやるなよ？」

「……わかった。シキまたね。あ、あと剣。しっかりしてよ」

「ああ。悪い。ありがと」

王はセシリアが不満がありながらも納得した様子を見てから、城の出口へ向かって歩いて行ったので、シキはセシリアから剣を受け取り、王の後ろに付いて追いかけて行った。

「そうだ。少年は移動門ゲートというのを知っているか？」

「知らないな。王様が通る門のことか？」

「違う。そうかあつちの国ではこれも使用されていないのか。移動門ゲートとはこの国の1区1区に設置されているものなんだ」

「うん」

「使い方は簡単だ。移動門ゲートに入って行きたい区の名前を言えばそれでその区にある移動門ゲートに行けるというわけだ」

「それは……便利なものだな。移動する手間が随分省ける」

「うむ。まあ移動門ゲートを1人で使うのには上級魔法術使いになる必要があるのだが、少年の場合問題ないだろう？」

「ああ。でも上級魔法術使いになるまで使えないって結構厳しいな」

「そうだな。だが、移動するときには上級魔法術使いが1人いれば移動できるんだ。だから門の横にはいつも1人は上級魔法術使いがいる。が、そいつに連れて行ってもらう場合は多少金がかかる」

「嫌な商売」

「そう言っただけでやるな。奴らも奴らで苦労している」

「へえ」

「ほら、見えて来ただろ？ あれがこの1区の移動門ゲートだ」

王はそう言いながら目の前の門を指さした。

門の高さは横に5メートル、縦に10メートルくらいの高さだった。横には暇そうにしている男が1人、門の壁に背を預けながらあくびをしていた。

門の柱は2本とも四角く整えられていて、柱の間はもやもやとした霧のようなものが漂っていた。

「では行くとするか。門をくぐりながら第81区と言ってくれ。まずは我が手本を見せよう。その後に少年が付いて来てくれ」

そついうと王は第81区と言いながら門をくぐって行く。

シキは後ろからその様子を眺めていた。

（お！ 本当に移動したのか。王様がどっかに消えやがったぜ）

門の中を見てもやもやした霧以外何もなく、王の姿などどこにもいなかった。

（えーと。行きたい場所を言いながら行けばいいんだよな）

「第81区」

シキは気軽に言いながら門をくぐった。

そつすると目の前のもやもやとした霧が深くなっていった。

「いてっ」

門のもやもやとした霧が深くなったのを無視してずっと歩き続けていたら、先に門をくぐっていた王にぶつかってしまった。

「うむ。ちゃんとしてきたな」

「ああ……いてて、思いつきぶつかった……。王様^{オーバーマジック}魔力解放使つてなかったか？」

シキはぶつかった頭をなでながら尋ねた。

「こ、この程度のこと^{オーバーマジック}で魔力解放を使うわけな、なかるう」

王は視線を泳がせながら言った。

どうやら^{オーバーマジック}魔力解放を使っていたらしい。

シキが王をジトーとした目で見てみると王がこほんと咳払いをした。

「さてこれから学び舎へ向かうわけだが、その前に少年に少々渡しておくものがある」

「？」

シキが何を渡されるのかと疑問に思っていると、王はガサゴソと自分のポケットの中を漁っていた。

ポケットから取り出されたのは金貨が数枚。

「この程度ですまないが、取っておいてくれ」

そういうと王はシキに手を出せと言う。

シキが手を出すと2シルエと13エルの金貨が手渡せられた。

「！？ ちょっと王様！ こんな金額貰えないぞ！？」

「何言っている。ただのお礼だ。我としてはあと20シル工程やりたいのだが……手持ちが少なくて悪かったな」

「いやいやいやいや！ 多すぎるから！ 返しますよ！」

「受け取ってくれ」

「……わかりました」

シキはしぶしぶ納得しながらポケットに金貨をしまう。

シルエ金貨10枚程あれば家を買えてしまう程の物なので、失くさないようにする。

「ではさっさと行こうか。ここから学び舎まで近いとはいえ、歩きで10分はかかる」

「それ近いって言うのか？」

シキの問いを無視して王はどんどん進んで行ってしまつので、シキは溜息をついてからゆっくりと追いかけた。

学び舎に着いたのはそれから5分程度だった。

（王が言っていた10分つてのは間違いだったのか？）

と疑問に思ったが口に出して言うことはなかった。

学び舎は3階建てで、正面玄関からではよく見えないが、なんとなく広そうだった。造りは木造で、魔法でもぶつけたらすぐに燃えてしまいそうだった。

「この学び舎はよく燃えそうだ。とか思ったか？」

「ご名答。よくわかったな」

「我も少年のパターンが少しわかった気がするな。この学び舎……いやこの国のほとんどの家は精霊魔法使いによって保護されている。簡単には破壊されない」

「精霊魔法使って本当、便利屋だな」

「それだけ強力ってことだな。さて、さっさと入って手続きして、学んで来い」

「ああ。主に歴史とか」

「うむー。ここに来る者のほとんどは戦闘技術目当てで来ている馬鹿共ばかりだからな。もしかしたら少年は仲間外れにされるかもな」
「ありえそうだな。まあ俺の目的はそういうのじゃないから問題ない」

「そうか」

シキは王に連れられながら玄関に入り、学び舎へ入っていく。

「つーかここに来るまでに他のここに通ってるらしい奴らを見かけなかったけどさ、もしかして遅く着いたのかなのか？」

「多少な。ほんの数分だから気にせんでいいわ」
「了解」

靴を履きかえることなく学び舎の中を歩く。

行く場所は2階らしい。

「あ」

「どうした？」

「そつえば学び舎（じま）って剣持ってていいのか？」

「ああ。そんなことか。それなら問題ないぞ。この国でどこで剣を持っていようが、拳銃を持っていようが、違反になることはない」
「そうか。ならいいや」

会話をしているうちに学び舎の職員がいる部屋の前まで到着していた。

「さて、ここの部屋に入ったら我と少年は別行動しなくてわな」

「職員が説明してくれるんだろ？ 大丈夫だって。わざわざ悪かったな」

「うむ。まあ少年なら大丈夫だとは思うが、一応警告しておこう」
「？　なんだ？」

王は小さな声でシキに言う。

「ここに居る時は常に警戒しておけ。いつ襲われるかわからないからな」

「なんだ。そんなことか。わかってるよ」

（そんなものは最初からずっとしてるって）
シキは心の中でばやいた。

「……そうか。では行こう」

そういうと王は職員室をノックもしないで開ける。

「あー我だ。連絡は入れていたな？」

「あつ！　はいっ！　どうもご苦労様です！」

王が職員室に入ると頭の髪の毛が少し薄い男がオドオドした様子で答えた。

王はシキの方を指さしながら言った。

「こいつが今日からここに入る奴だ。面倒見てやってくれ。金は渡したよな？」

「は、はい！　寮の準備も出来ています！」

「そうか。なら我は少しこの長と話してくる。あとは頼んだ」

そういうと王は職員室のさらに奥に進み、奥にあった扉の中へと入っていった。

「えーと貴方のお名前を覚えてもらっても、よ、よろしいですか？」

オドオド口調は王様の前だからかと思っていたが、目の前の男はシキに対しても同じだった。

（人と話すのが苦手？　こんなんでもこの学び舎の教師やってんのか？）

正直言つと彼の方が学んだ方がいいような気もする。勿論勉強の方ではなく人と話すことだが。

「シキだ。貴方の名前は？」

「わ、私はブザライ・メットです。い、一応貴方のクラスの担当をさせてもらっています」

「そうか。今日はそのクラスの所に行くんだよな？」

「は、はい。すみません。時間がないので歩きながら説明させてもらつて、よ、よいでしょうか？」

「わかった」

クラス担当のブザライ・メットは職員室から出て、そのまま通路を歩きはじめた。クラスは職員室と同じ2階にあるらしい。

「こ、この第21学び舎ではクラスが5つあります」

ブザライは説明していく。

「きよ、教育内容は戦闘、知識。お、主に騎士やそれに準ずるものになるのに必要なものを勉強しています」

「……」

「く、詳しくはそれぞれの担当の教員がいるので、わ、わからないことはそちらで訊いてく、ください」

「ああ。図書館とかつて、場所はどこにあるんだ？」

「そ、それは今日のことが終わった後りよ、寮に案内するときに説明させていただきます」

「わかった」

「こ、ここがクラスです」

ブザライが止まって指差した所は教室。クラスの中から話声が少し聞こえる。

（上級魔法使いが少し、ほとんどが下級魔法使いか？）

シキはなんとなく教室の前で感じた魔力を考える。

（それにしても、俺こんなに魔力感じる能力あったかなあ……。わかったとしても、今までなら魔法が発動した時くらいだったし……。このことが少し特別だとわかるのは少しあとのことだ。

ブザライが教室の扉を開けて、教室に入って行った。

シキには少し廊下で待っているようにとオドオドとした口調で告げてから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6914w/>

魔法騎士と精霊魔法師

2012年1月4日21時51分発行